伊藤圭介編著『植物図説雑纂』について

磯野直秀

文政期から明治20年代にかけて活躍した伊藤圭介の旧蔵書は、後継者の孫伊藤篤太郎や他の子孫を経て、いま国立国会図書館の伊藤文庫をはじめ、名古屋大学附属図書館や名古屋市東山植物園などに伝わっている。その蔵書の一つ、国会図書館が所蔵する『植物図説雑纂』（別6-9、注１）は全254冊にのぼる大部の資料集だが、いままで詳しい報告が無い。この数年のあいだ私は本資料を調べ、数多くの未紹介資料などが存在すること、飯室庄左衛門著『草花図譜』（草花譜）が切り取られて数多く所収されていることなどに気付いたので、本資料の由来や概要とともに、いくつかの新出資料を報告しておきたい（注２）。なお、参照の便を考慮して、所収されている主要資料の一覧を「付録」として稿末に付しておく。

1　伊藤圭介について

伊藤圭介は享和３年（1803）１月27日に医師西山玄道の次男として名古屋に生まれ、父の旧姓伊藤を継いだ（注３）。幼名は左仲、初め名は舜民、字戴尭、のち名を清民、字圭介と改め、通称を圭介と称した。号は錦窠・真逸、堂号花繞書屋・十二花楼・修養堂・太古山樵。水谷豊文に本草を学び、豊文を中心とする尾張本草家・博物家の会として著名な嘗百社では、豊文門下の大河内存真（圭介の実兄）・大窪昌章（二代目薜荔菴）・吉田平九郎（雀巣庵）などとともに有力メンバーの一人であった。一方、蘭学は藤林普山・吉雄常三に教えを受け、文政10年（1827）にはシーボルトに師事、シーボルトの良き協力者ともなった。文久元年～３年（1861～63）には幕府の蕃書調所（洋書調所）物産方に出仕し、その後名古屋に戻っていたが、明治３年（1870）に政府から「大学」（注４）出仕を命じられて東京に転居する。翌４年から７年までは文部省に勤務し、８年からは小石川植物園（幕府の小石川薬園の後身）に移る。10年には東京大学員外教授となって引き続き小石川植物園を担

当し、21年には日本最初の理学博士号を授与された。没したのは明治34年（1901）１月20日、99歳の長寿であった。出版された著作は多いが、『泰西本草名疏』『日本産物志』『日本植物図説・草部イ初編』『小石川植物園草木目録』「花史雑記」などが著名である。

2　伊藤篤太郎について

文久２年（1862）頃、圭介は門下だった名古屋の医師中野延吉（1842～1909）を養子として、五女の小春（1844～1922）と結婚させた（注５）。篤太郎はその夫婦の長男として、慶応元年（1865）11月29日に誕生した（注６）。明治６年（1873）６月、９歳の時に上京するが、翌７年４月には名古屋に戻る。ついで10年には東京大学医学部予備門に入ったが、その年のうちに病で退学したという（注７）。一方、祖父圭介が勤めていた東大小石川植物園にはしばしば赴いて草木に親しんだようであり（注８）、明治12年２月復刻の宇田川榕菴著『菩多尼訶経』で「翻刻人　伊藤篤太郎」と名を出しているのが注目される。この年、篤太郎は15歳だったが、その同じ年の８月、圭介が後継者として期待していた三男謙が病死してしまう（注９）。そこで、圭介は篤太郎に植物方面の跡を継がせる意志を固め、明治17年には篤太郎をイギリスに渡らせ、ケンブリッジ大学で植物学を修めさせた。帰国は同20年、23歳のときで、すぐ東京植物学会などで活躍を始め、同27年（1894）から29年までは鹿児島高等中学造士館で教鞭をとり、32年には松村任三との共著「琉球植物誌」（注10）を発表し、翌33年に理学博士号を得る。しかし、以後は不遇で、大正11年（1922）には東北帝国大学理学部の講師となったが、それも昭和３年（1928）には定年を迎えた。退職後は東京に住んで、祖父圭介の事跡を調べたり、その遺稿の整理につとめた。没したのは、昭和16年（1941）３月21日、年77であった。

3　『植物図説雑纂』の過去と現在

本稿の主題である『植物図説雑纂』（以下、『雑纂』と略すこともある）は、本邦産の植物および渡来植物について、古来の和漢文献や写生図・印葉図・一枚刷・小冊子などをできるかぎり収集しようとした資料集である。最初は草部と木部から構成する構想だったらしいが、草部が『植物図説雑纂』の名のままだったのに対して、木部の方は圭介自身が『錦窠植物図説』の書名に

改めた。ともに未定稿であるが、圭介逝去の時点で前者は計130冊、後者は164冊（注11）という大部の著作になっていた。伊藤圭介がいつ頃からその編集に取りかかったかは、はっきりしない。ただ、『雑纂』冊１の扉１裏には次のように記されている：

「此編製本ヲ命スルヤ、当時公私甚紛擾ニシテ、自ラ之ヲ訂正スルコト能ハズシテ、全ク佗人ノ手ニ委スルモノ多シ。故ニ順次ノ杜撰謬誤、亦少ナカラズ。他日、之ヲ校訂セントス。果シテ此志ヲ達スルヤヲ知ラズ。

明治九年三月一日　錦窠老人識」

これによると、明治９年（1876）には製本段階に一応入っているのだから、編集に着手したのはかなり前、おそらく幕末の頃ではないかと思われる。しかし、この『雑纂』は大事業であり、すでに老境に入った圭介一代で完成するかどうか心もとない。上記の文をしたためた頃は、三男謙にこの大業を継続させようと考えていたのであろう。しかし、明治12年（1879）８月に謙は29歳の若さで急逝してしまった。

圭介には、ただ一人の息子として四男の恭四郎が残されたが、彼は学問の世界に向いていなかったらしい。そこで、前述のように圭介は孫の伊藤篤太郎に望みを託した。現存する『植物図説雑纂』および『錦窠植物図説』の表紙には「孫伊藤篤太郎ニ嘱托」などの貼札が見られる（口絵１）し、また『雑纂』冊１の冒頭部には次の文が残り、遅くとも明治15年には圭介が篤太郎を後継者と定めていたとわかる（口絵２）。

「植物図説雑纂

伊藤篤太郎ニ与フ

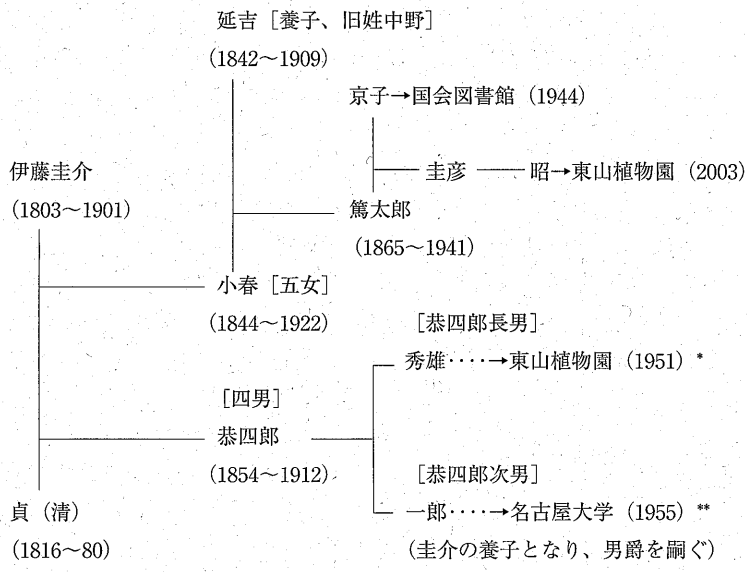
陸続尚増補スベシ

明治十五年六月 伊藤圭介記」

だが、圭介が世を去った後、彼が望んだような形では事が運ばなかった。

圭介の蔵書の大半はもちろん自宅にあっただろうが、一部は孫篤太郎が編集のため手元に置いていたと思われる。そして、最晩年の圭介は四男恭四郎夫妻に身辺の世話を任せていたので、没後自宅の蔵書は恭四郎が受け継ぎ、篤太郎所持分はそのまま篤太郎が持ち続けたようである。そう考えるのは、後述するように『錦窠植物図説』や、一連の『錦窠図譜』が中途半端な形で３カ所に分かれて現存しているからである。

やがて、本家を継いだ恭四郎が明治45年（1912）に没すると、同家に伝わった資料は長男秀雄と次男一郎が分け合った。こうして、圭介旧蔵の博物誌関係資料は篤太郎・秀雄・一郎の３家に分割され、その大部分がのちに国会



* 吉川芳秋・東山植物園、「理学博士・男爵伊藤圭介翁遺品調査・鑑定報告書」、名古屋市東山植物園、1968年。該当個所、頁１。

** 同上、頁11。

図１　家系図と資料の移動関係（関係者だけを表示）

図書館（伊藤文庫；注12）・名古屋大学附属図書館（伊藤文庫）・名古屋市東山植物園（伊藤圭介記念室）に所蔵されることに至った（注13；表１～３参照）。もっとも、篤太郎の分には独自で収集した資料も含まれるし、また篤太郎の死後に市場に流出したものも少なくない。その推移の大筋を家系図とともに示したのが図１である。

焦点を『植物図説雑纂』に絞ると、圭介が世を去ったとき、その大半は恭四郎が引き継いだ。しかし、圭介自身が篤太郎に受け継がせるつもりだったのだから、篤太郎は引き渡しを求めたに違いない。だが、望みが叶わないままに時が流れ、明治45年に恭四郎が死去した後、翌大正２年（1913）にその長男秀雄と次男一郎から、ようやく篤太郎の手に『植物図説雑纂』が渡されることになった。『雑纂』冊１に残っている次の２資料がそれを物語る。上は『雑纂』引き渡し状、下は受領書の草稿である。

「植物図説　草の部　百拾九冊
　右、御使の方へ御渡申候間、御受納相成度候也
　　五月六日　伊藤内㊞
　伊藤篤太郎様」（日付右脇に鉛筆で「大正二年」と記されている）

「領収証
植物図説雑纂草部　壹百拾九冊
　右本、御渡被下、正ニ領収候也
　大正二年五月六日　　伊藤篤太郎
伊藤秀雄様
伊藤一郎様
　追而　左記之七冊、不足致居候ニ付‥‥御手数ナガラ御取調被下‥‥
　植物図説雑纂草部、巻之九拾七・百九・百拾壹・百拾参・百廿三・百廿九、〆七冊」
（冊１所収の篤太郎別メモによると、冊*97*・*109*・*111*・*113*・*121*・*123*・*129*の７冊不足とあり、上の草稿では「百廿壹」が抜けている）

なお、『雑纂』原本の最終巻の題箋には「百参拾止」と記されているから、全130冊だったはずだが、このとき篤太郎に渡された分は119冊しかなかった。119＋7＝126で、130とは４冊異なるが、この４冊は圭介が没した時点で篤太郎の手元にあり、残りの分126冊を請求したのではないかと、私は考えている。

ともかく『雑纂』は篤太郎の手にわたり、圭介が望んだとおり、孫によって編集が続けられることになった。だが、祖父圭介を厚く尊敬する篤太郎は『雑纂』を大きく改変することは避け、原本に注記を付したり、資料の一部をより適切な圭介の他著作（『錦窠羊歯譜』や『錦窠菌譜』）に移動したりするに留め、圭介没後の新資料はほとんど付け加えなかったようである。

篤太郎は昭和16年３月21日に世を去ったが、それから丸３年後の昭和19年３月22日、『植物図説雑纂』は妻京子（注14）から帝国図書館（国会図書館の前身）に寄贈された。当時の記録では受け取った冊数は計122冊、欠本は冊*97*・*109*・*110*・*111*・*113*・*121*・*123*・*129*の８冊であった（注15）。大正２年に篤太郎が受け取ったときの欠本は、補充されないままに終わったことがわかる。また、冊*110*は篤太郎が冊*51*に合冊したので、形式的に「欠本」となったものである（注16）。

一方、名古屋市東山植物園には、第二次大戦後に伊藤秀雄の遺族から圭介

旧蔵書が寄贈され、そのうちに『植物図説雑纂』「ミ」部の原本冊*113*が含まれていた（いま、分冊して4冊；注17）。

したがって、現時点での『植物図説雑纂』欠本は原本冊*97*・*109*・*111*・*121*・*123*・*129*の6冊である。

4　『植物図説雑纂』以外の資料集

伊藤圭介は『雑纂』とともに、動植物にわたる資料集をいくつも残した。それを所蔵館ごとに、表1～3としてまとめた。

このうち、『錦窠植物図説』（注18）は木部が対象で、草部の『植物図説雑纂』と一対になるものだが、現在は巻1～10（巻9は欠本）だけが国会図書館に、巻11以降の残部が名古屋大学にと、不自然な分かれ方をしている。一括されていたものが、このような形で二分されるとは考えにくいので、圭介が没したとき巻1～10は篤太郎の手元にあり、それ以外は恭四郎家にあって、やがて一郎へと受け継がれたのではないか（注19）。そして、前者が帝国図書館に入り、後者が一郎家から名古屋大学へ寄贈されたのだと思う。なお、この名古屋大学寄贈分には巻11以降に11冊の欠本があり、冊番号が明示されているものは計143冊であった（名大では、ほかに冊番号が記されていない1冊をくわえて、全144冊として扱っている）。

『錦窠植物図説』以外の通称『錦窠図譜』は、伊藤篤太郎家→帝国図書館、伊藤一郎家→名古屋大学と伝わった2系統がある。いま国会図書館が所蔵する『錦窠菌譜』『錦窠竹譜』『錦窠羊歯譜』に付されている篤太郎の序文には、「未整理状態だったので、篤太郎が編集して冊子の形にまとめた」旨が記されているが、その序の年記がすべて明治35年（1902）なので、圭介の没した時点で少なくとも上記資料が篤太郎の手中にあったと思われる。

また、『錦窠燈心草科譜』の序は昭和13年（1938）、『錦窠蘭譜』『錦窠禾本譜』の序は昭和14年で、これらも未整理資料をまとめたという。ただ、圭介の逝去時から篤太郎が資料を所持していながら、晩年まで整理する余裕が無かったのか、のちに本家から未整理資料を渡されたのかはわからない。

このほかに、国会図書館には『植物図説雑纂』別11-33本17冊があるが、これは木類・草類の資料が入り交じっており、部分的にまとめられてはいるが、全体としては未整理の資料を集めただけと思われる。篤太郎の序跋あるいは識語的記載も無く、いつ入手したかはわからない。名古屋市東山植物園蔵『植物図説雑集』2-94・2-95本2冊も、同じ性格の残存資料集である。

表1　国立国会図書館蔵『錦窠図譜』類*

書名	請求記号	冊数	備考
錦窠蟹譜	別11－7	5	イロハ順：正編2冊・続編3冊
錦窠魚譜	別11－11	32	イロハ順：鮫譜・鮭譜など、もと17冊を分冊
錦窠禽譜	別11－10	23	イロハ順：正編6冊・続編17冊、もと20冊を分冊
錦窠禾本譜	別11－8	25	イロハ順：イネ科ほか・曲直瀬正貞『芒類写真』
錦窠菌譜	別11－9	13	イロハ順：キノコ類
錦窠羊歯譜	別11－12	13	イロハ順
錦窠竹譜	別11－14	8	イロハ順
錦窠燈心草科譜	別11－15	1	イグサ・セキショウ類
錦窠穀精草科譜	別11－16	1	ホシクサ類
錦窠蘭譜	別11－17	4	イロハ順：冊4は『小石川植物園蘭譜』
錦窠植物図説	別11－13	11	木類の科別・牡丹譜：冊11はイネ科のアシ
植物図説雑纂	別11－33	17	木類・草類・印葉図集など、雑多な資料
植物図説雑纂	別6－9	254	草類、イロハ順：もと122冊を分冊

* ここに掲げた図譜は、すべてマイクロフィルムにも収められている。

表2　名古屋大学附属図書館蔵『錦窠図譜』類*

書名	請求記号	冊数	備考
錦窠虫譜	486.03Ki	10	イ～ク・『蝉譜』・飯室『虫譜図説』写本
錦窠魚譜	487.503Ki	19	イロハ順の部・鯨譜・奥倉魚仙写本など
錦窠獣譜	489.03Ki	1	海外産動物が多い
錦窠動物図説	484 I	1	扉題「海鹿集説」：海鹿＝アメフラシ
錦窠植物図説	470.3 I	144	木類の科別

* 名古屋大学附属図書館編『伊藤文庫図書目録』(1956) による。

表3　名古屋市東山植物園伊藤圭介記念室蔵『植物図説雑纂』類*

書名	請求記号	冊数	備考
植物図説雑纂	2-90～93	4	『雑纂』草類「ミ」部の原本冊*113*を4分冊化
植物図説雑集	2-94・95	2	未使用原稿・原図類

* 名古屋市東山植物園編『伊藤圭介記念室蔵書・蔵品目録』(1992) による。

5　『植物図説雑纂』の構成

①現在の状態

前記のように、『雑纂』の原本は130冊。現在はそのうち123冊分（篤太郎が原本冊*110*を冊*51*と合冊したので、冊子としては122冊）が国会図書館に、原本１冊（冊*113*）が名古屋市東山植物園に所蔵されているが、冊*97*・*109*・*111*・*121*・*123*・*129*の６冊 の行方は不明のままである。

『雑纂』の原本は大半の冊子が分厚すぎて、扱いにくい。そこで国会図書館では、適切な量になるように大半の原本を２～３冊に分冊。その際、最初の冊に原題箋を残し、２冊目・３冊目には新しい表紙・新しい題箋を付けて製本した。この処置により、分冊後は全部で254冊となっており、以下に記す国会図書館本の冊番号は、特に断らないかぎり、この分冊後のものである。なお、この分冊化によって前後２冊に分かれた項目が少なからずあるので、注意する必要がある。たとえば、フクジュソウは現在の冊159と冊160に、ユリは冊214と冊215にまたがって、それぞれ所収されている。

②全体について

序や跋は存在しない。総目録と索引も無い。編者伊藤圭介の没する前に大要は出来上がっていたようだが、孫の篤太郎が補足した資料も多少存在する。また、所収資料の筆者の名や経歴などについて篤太郎が時々注記を加えており、そのなかには有用な記述が少なくない。

対象は日本産および日本に渡来した草類である。その配列は和名のイロハ順となっている（注20）。ただし、江戸時代の通例として、最初の１字（頭音）だけのイロハ順であり、２字目以下は配列に関係しない。また、近縁な種類あるいは形状が類似する草類を同一項目で扱うことが多い。たとえば、「アヤメ」の項では、アヤメのほか、ハナショウブ・ヒオウギアヤメ・カキツバタ・イチハツ・シャガなども取り上げる。また、「菊」「豆」「百合」などの見出しでは、かなり広範囲の種類を扱っている。

各項には、各頭音ごとに「一」から始まる項目番号が付されている。たとえば、キの一はキンバイザサ、二キンセンカ、三キンポウゲ‥‥など。ただし、編集の過程で項目をしばしば移動したらしく、欠番や番号の変更が多くて、番号は目安にしか使えない。

③原表紙

大きさが縦25.1×横17.3 cm内外で、黒色・金網目空（から）押し。口絵１に冊１の表紙を示すが、左端に刷題箋がある。子持ち枠で囲まれ、区切りの上に「伊

藤／圭介稿」、下に「植物図説雑纂」と、圭介の自筆を版に彫っている。題箋の中央右手には「錦窠」の朱楕円印を捺す。題箋の下右には□、下左には○が刷られており、□には草（草部）か、木（木部；実際は木部が無い）を、○中にイロハ順の片仮名を書き込むようになっている。冊１では、□中に「草」、○中に「イ」と書き込まれている。また、○の下に「自一至十四」（項目番号１～14）、最下部に冊番号の「一」とそれぞれ墨書、「一」に重ねて「伊藤圭介」朱方印を捺してある。上記楕円印とこの方印は、全題箋に捺されている。これが完全な姿だが、じつは所収項目番号の表示は無い場合が多い。何回も改訂を重ねるので、最終段階で書き込む予定だったのが、そのままになったようである。

一方、冊１の表紙の右側には「孫伊藤篤太郎ニ嘱托」と圭介が墨書した紙、その下に「尾張伊藤圭介之記」の朱矩形印を捺した紙を貼付している。ただし、大半の原表紙では「‥‥嘱托」の紙が剥れて跡だけが残り、朱印は汚れて読めない（注21）。中央上部には、篤太郎の「伊藤篤太郎記」朱方印を捺した紙が貼られている。

④新表紙

分冊に伴って増加した冊子に付けられた新表紙も黒色だが、金網目は無い。サイズは原表紙と同じ。題箋は、冊209までは未使用の原題箋（注22）を貼りつけてあるが、書き込みは無く、新しい冊番号は表紙のラベルに記されているだけである。また、冊211以降は子持ち枠だけで文字が一切無い題箋を貼付している。

⑤見返しと扉

原表紙の見返しには、圭介が「禁㆑出㆓門外㆒」と大書していることが多い。また、原表紙のある冊では、扉に「伊藤きやう氏寄贈書」と記した青長印（氏名は黒印）と「昭和十九・三・二十二・寄贈」と記した帝国図書館の朱円印が捺されている。「きやう」は京子で、篤太郎夫人である。

⑥用紙

用いているのは無枠の分厚い和紙で、二つ折にして袋綴じとし、スクラップブックの台紙として使われている。引用文を台紙に記していることもあるが、多くは、別の紙に記した抜き書や図、書物や新聞の切抜き、商品ラベルなどを貼付している。

⑦目次

総目次は無い。圭介は原本各冊に目次を置く予定だったらしく、扉には「目次」と記すことが多い。実際に「チ部」から「カ部」の最初までの原本11

冊だけには、巻頭の数頁に罫線を引いて目次が置かれている。その場合、「植物図説集稿」の目次題を用いており、これが最初に考えられていた書名のようである。しかし、これ以外の冊には目次が無い。

⑧収録資料

資料は、和漢の本草書・博物書、写生図、印葉図、押花、花銘や番付見立の一枚刷、新聞、商品ラベル・広告、博物会規約・開催予告‥‥と多岐にわたる。書物も絵図も転写が多いが、刊本の端本や稿本・写本の切抜き、原図も少なくない。別刷やパンフレット、新聞、書簡なども含まれる。年代は古代から明治30年代初頭、すなわち圭介の没する直前までである（注23）。

資料の転写には圭介自身をはじめ、数人が関与したと思われるが、癖の強い圭介の字は別格として、大半は筆写者の氏名がわからない。ただ、同一資料は筆跡が同じことが多く、必要な資料は一括して写させ、編集にあたって該当個所をそのつど切り抜いたと思われる。

所収した資料の多くには圭介が朱筆で文献名を記しているが、人名の略号（たとえば、馬場大助は「馬」）だけだったり、何の記入も無いことが稀ではない。それでも様式などから出典が推定できるものもあるが、手掛かり皆無の事例も少なからずある。

また、これらの資料が順序よく貼り込まれているわけではない。前の項の資料が次の項に紛れ込んでいることもしばしばである。本来は数頁連続していた資料が飛び飛びに貼られていることはむしろ普通で、資料が分断されてきわめて読みにくい。なかには、尻切れとんぼになっていたり、順序が乱れたり、中間部分が失われていることもある。次々に資料を継ぎ足したためかとも思われるが、綴じる段階でのミスもあるらしい。この混乱が本資料集の最大の欠点といえよう。

以下、いくつかに分けて叙述する。

●本草書・博物書など：使用されている資料は、江戸時代の和書のうちしばしば用いられているものだけで100を超える。なかでも目につくのは、水谷豊文の『本草綱目記聞』（注24）、飯室庄左衛門の『草花図譜』『草花譜』（切抜き：注25）、伊藤伊兵衛の『地錦抄』シリーズ（端本切抜き）、岩崎灌園著『本草図譜』（転写＋端本切抜き）と同『綱救外篇』（転写）、同『本草穿要』（転写）、横井時敏著『嘉卉園随筆』（転写）、漢書の『植物名実図考』（刊本切抜き＋転写：注26）、著者が不明の『花名集』（転写：注27）、『草木名鑑』（転写：注28）、大槻玄沢篇『蘭畹摘芳』筆録本（転写：注29）、前田利保著『万香園裡花壇綱目』（７節参照）、伊藤圭介の『日本植物図説』（注30）・「花史

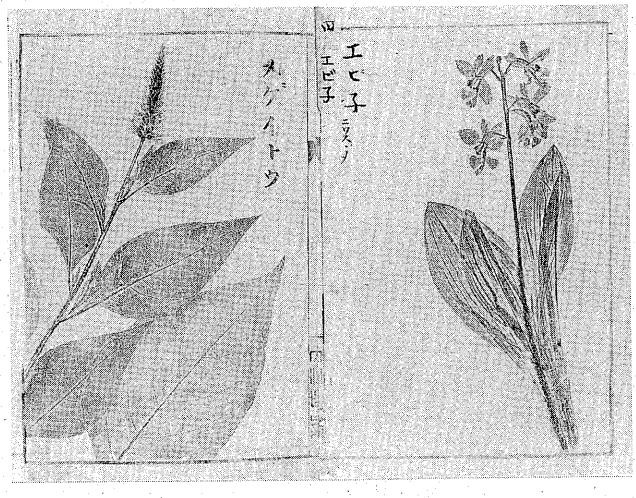


図２　尾張藩士大窪昌章の印葉図：左はノゲイトウ（雑纂冊155）、右はエビネ（雑纂冊233）。ノゲイトウ（野鶏頭）の文字は木活字を捺している。折れ目ではっきり見えないが、柱記に「大窪昌章」と刷った用紙を用いている。

雑記」の草稿（注31）・蕃書調所出役時代の覚え書（注32）など。

小野蘭山の『本草綱目啓蒙』は梯（かけはし）南洋が刊行した重修版を使っているが、主として梯の増補部分を利用している。『啓蒙』は流布しているし、水谷豊文の『本草綱目記聞』が『啓蒙』を引用している（→注24）こともあって、『啓蒙』の記載そのものはあえて載せなかったと考えられる。

●上記文献以外の写生図：水谷豊文（注33）や圭介（注34）と思われる写生図が多いが、服部雪斎（注35、口絵３）、加藤竹斎（注36）、馬場大助（注37）、宇田川榕菴（注38）などの図もかなり所収されている。福寿草・桜草・松葉蘭などの図譜を一括して貼付した例も少なくない。

●印葉図（花や実も）と腊葉（押し葉）：尾張嘗百社の人々は印葉図（注39）をよく作り、『雑纂』にも多用されている。しかし、用紙版心に「大窪昌章」（注40）と刷られている同人の作（図２）と、圭介の注記付で彼自身の作と思われる図以外は、作者が特定出来ない。一方、押花や腊葉も時に貼付されているが、その数は僅かである。

●一枚刷の類：園芸植物や特殊な植物を描いて説明文を付した一枚刷、銘鑑（花銘一覧）、品評会の相撲見立番付、園芸展示会や植木屋の広告。

●伊藤圭介宛の書簡：門下だった田中芳男からの来信がもっとも多いが、同じく門下の丹波修治、長崎留学時代の親友賀来佐一郎やその弟で小石川植物園での同僚賀来飛霞などからの書状、牧野富太郎からの質問（注41）、内国博覧会などの際の質問など。

●特殊な資料：商品のラベル・宣伝文・欧米の園芸カタログ・和本の書袋など。また、明治時代に市販された農作物種子を袋ごと保存している例があるし、琉球産の芭蕉紙や麻カラ紙、陸奥信夫摺の帛紗、浅草海苔などの実物も残されている（付録参照）。

●その他：江戸時代の尾張嘗百社の資料提供要請文や薬品会の予告、明治期の嘗百社・温知会・交友社博物会・京都本草会などの資料、オーストリア農学会によるシーボルト記念碑建立資金の募集要項などがある。これらは各冊の末尾に所収されていることが多い（付録参照）。また、圭介は明治10年頃から毎年のようにさまざまな印を作らせたが、それを納品した際の見本捺印が幾つも残されているし、印譜のように自ら多数の印を捺した頁（口絵２参照）もある。

＊　　＊　　＊

『植物図説雑纂』には、これまで知られていないか、現存が稀な資料が数多く所収されている。その幾つかを、６～９節に示しておきたい。

6　『草花図譜』（草花譜）

飯室庄左衛門は幕臣で、名は昌栩、通称庄左衛門、号楽圃・千草堂。『寛政重修諸家譜』巻227によれば、寛政元年（1789）の生まれ。没年は明確でないが、安政５年（1858）ではないかと思われる（注42）。赭鞭会（注43）の一員として活動し、著作としては『虫譜図説』12冊（安政３年序）がよく知られている。その他に『草花図譜』『草花譜』があるが、表４に示したように、現存資料は端本か、端本を数冊まとめたにすぎず、また図のみで説文を欠くものが多いので、ほとんど評価されていなかった。

ところが、『植物図説雑纂』には『草花図譜』『草花譜』の切抜きが数多く所収されており、図に説文を伴う例が多い。しかも、筆跡（注44）から自筆と判断される場合が大半であることに気付いた。そこで、『雑纂』所収の該当する図と説文をすべて拾い出して、検討してみた。大部分の資料には圭介が「草花図譜」「草花譜」と朱筆しているが、『雑纂』に貼付する際に原本の版心部分を取り去っているので、それぞれの巻番号はわからない。なお、『草花譜』

表4　飯室庄左衛門自筆植物図譜：（7）以外は国会図書館蔵

資料	登録書名	請求記号	冊数	番号	内題	図部	説部	図数
（1）	草花説*	別9114	2冊	①	内題なし	+	−	79
				②	草花譜巻13 蔓草	+	−	11
				③	草花譜巻14 山湿石水草	+	−	16
				④	草花譜巻15	+	−	10
（2）	草花説	WB9-5	3冊	①	草花説巻5	+	−	65
				②	草花図譜巻8 湿草	+	−	35
				③	草花図譜巻9 湿草	+	−	34
				④	草花説巻11 湿草	+	−	39
				⑤	草花説巻12 湿草	+	−	22
（3）	草花譜*	特1-1879	1冊		草花譜	+**	−	73
（4）	草花図譜	特1-2180	1冊		草花図譜巻19 芳草	+	+	33
（5）	草花図譜	特1-2391	1冊		草花図譜巻45	+	−	21
（6）	草花写生図	特1-215	1冊		内題なし	+**	−	77
（7）	草花図譜*	杏雨貴293	13冊	①	草花図譜巻1 山草	+	+	27
				②	草花図譜巻14	+	−	36
				③	草花図譜巻16 芳草	+	+	16
				④	草花図譜巻17 芳草	+	+	22
				⑤	草花図譜 湿草	+	+	20
				⑥	草花図譜巻43 蔓草	+	−	26
				⑦	草花図譜巻44 蔓草	+	+	27
				⑧	草花図譜巻46 蔓草	+	−	23
				⑨	草花図説	+	−	56
				⑩	草花譜 湿草	+	−	77
				⑪	草花譜	+	−	50
				⑫	草花譜 蔓草	+	−	26
				⑬	草花図譜	+	−	20

* 伊藤圭介筆で品名を記した小紙を貼付してある図がある。

**図頁に注記を記す場合がある。

注1：資料（1）～（6）は国会図書館蔵、（7）は杏雨書屋。

注2：資料（1）と（2）は1冊中に数巻を含む場合があるので、すべて別個に示し、それぞれに番号を付した。

注3：資料（1）の冊2冒頭に「草花譜巻7芳草」の目録があるが、対応する図部・説部をともに欠くので、本表には載せなかった。

注4：内題中の「山草」「芳草」などは扉や目録の記載。

を増補改訂した著作が『草花図譜』ではないかと思われるので、以下では『草花譜』を含めて『草花図譜』の呼称を用いる（注45）。

今回調べたところ、『草花図譜』に由来する資料は、『植物図説雑纂』（別6-9本）全体で734点にも達することがわかった（注46）が、一連の『錦窠図譜』類にもかなり含まれている。それをまとめると以下の様になる。

植物図説雑纂（別6-9本）	734
植物図説雑纂（別11-33本）	2
錦窠植物図説	9
錦窠羊歯譜	35
錦窠禾本譜	14
錦窠竹譜	1
錦窠灯心草譜	2
錦窠穀精草譜	2
錦窠蘭譜	0
錦窠菌譜	0
合計	799

こうして、国会図書館所蔵の伊藤圭介編資料集には『草花図譜』由来の資料が総計で799点も存在することが明らかになった（注47）。

このうち、図と説文が揃う場合が551点（69%）、図だけが190点（24%）、説文だけが58点（７%）である。表４でわかるように、端本として現存する『草花図譜』には図だけで説文が無い事例が少なくないが、伊藤圭介が集めた『草花図譜』では逆に図と文がセットになっている方が多い。

その図は、すべて彩色されている。図は精密な写生図とは言えず、やや摸式的であるが、特徴をよく示している（図３）。ただ、花・果実・種子などの拡大図は、まったく見当たらない。

説文は、例として示した「薇衕（ビガン）」（図４）から明らかなように、見出しは漢名で、続いて「釈名」（あるいは「一名」）として漢土の異名、和名とその別名、『本草綱目』など他書の記載文を挙げる。ついで、いつ何から芽が出るかに始まり、葉や茎の形状を記し、さらに蕾・花・実の順でそれぞれ何月頃に生じるか、どのような形状・色彩かを述べ、枯れる時期を示して文を終わる。どの記述もかなり詳しい。そして、本項に続けて、近縁種の「小呉風草」の項に移るが、形状が多少異なるだけの「一種」を項として立てる場合も多い。どの説文もこの形式に従っていて、記述の整然さと詳細な点は江戸時代の草木譜では群を抜いており、現在の図譜類に勝るとも劣らない感じを受ける。

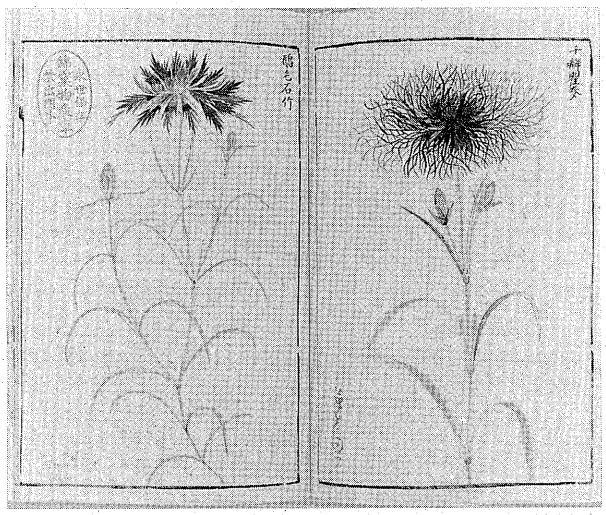
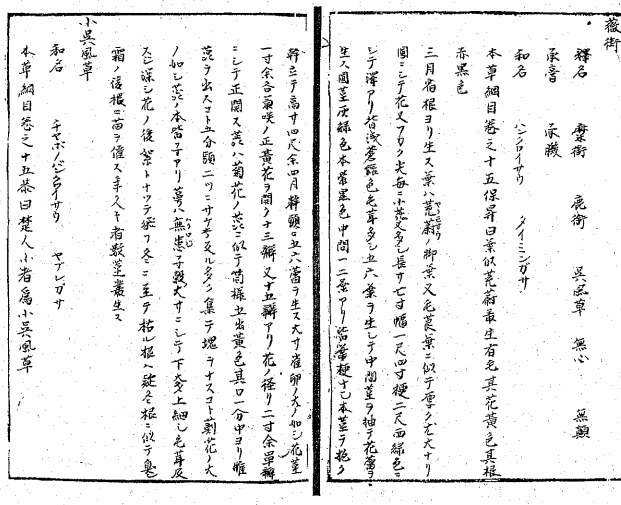


図３　飯室庄左衛門著『草花図譜』のナデシコ図（雑纂冊115）：左は鵝毛石竹（ガモウセキチク）、右は千弁瞿麦（ナデシコ）。左図左上の印は伊藤圭介が貴重品に捺した朱印。右図左下に圭介の筆で「草花図フ」と記されている。



薇衛

釋名　薇衛　鹿衛　呉風草　無心　無顔

漢音　漢薇

和名　ハンロイサウ　タイミンガサ

本草綱目巻之十五保昇曰葉似蕨箱春生有毛其花黄色其根赤黑色

三月宿根ヨリ生ス葉ハ蕨（ケツ）薪（シン）ノ御葉又毛莨葉ニ似テ雫ク花大サリ圓ニシテ花又フロク尖毎小茎多シ長サ七寸幅一尺四寸梗二尺面緑色ニシテ澤アリ背淡蒼露色毛茸多シ立六葉ヲ生シテ中間茎ヲ抽テ花蕾ヲ生ス國茎庶緑色本蕾黑色中間一二茎アリ蕾蕾梗ナシ本茎ヲ抱ク

將三丁高サ四尺余四月群顆ニ立六蕾ヲ生ス大サ雀卵ノ大ノ如シ花茎一寸余合瓣咲ノ正黄花ヲ開クナ三瓣又才五瓣アリ花ノ径リ二寸余單瓣ニシテ正開ス蕊ハ菊花ノ蕊ニ似テ筒様立出黄色其口一分中ヨリ帷蕊ヲ出スコト二分餘二ツニサケテ又ル多クノ集テ塊ヲナスコト剌花ノ大ノ如シ蕊ノ本蕾子アリ蕊ハ無悪子雙大サニシテ下交上細シ色茸反ス色緑シ花ノ後茎トナツテ梗ヲ冬ニ至テ枯ル根ハ鍵令根ニ似テ毫霜ノ後根ニ蕾ヲ億ス手入ヲ宿数茎叢生ス

小呉風草

和名　チヤボノビンガサウ　ヤブレガサ

本草綱目巻之十五恭曰楚人小者爲小呉風草

図４　飯室庄左衛門著『草花図譜』の薇衛の説文（雑纂冊23）

ただ、産地や渡来などの来歴、味や毒性、応用面には、ほとんど触れないのが物足りない。

上述のように、『植物図説雑纂』と一連の『錦窠図譜』から飯室庄左衛門著『草花図譜』に由来する図や説文を数多く見出したが、この調査の途上で『草花図譜』の別冊と見なせる図譜がいくつか現存することも明らかになった。それは国会図書館蔵の『百合花集』(辰-15、3冊；図のみ63点、自筆）と『蓮図譜』(特7-205、1冊；図のみ18点、転写)、および東山植物園蔵『菊花図譜』(東山2-62～64、3冊；図・説文36点、自筆）である（注48)。この3資料に含まれる点数の合計は117点。

結局、『草花図譜』資料は、①端本として従来知られていた資料に941点(表4)、②『雑纂』および国会図書館蔵『錦窠図譜』に含まれるものが799点、③別冊にあるものが117点で、その合計は1857点に達する。重出例があるので、それを割り引かなくてはならないが、岩崎灌園著『本草図譜』の1900点余に次ぎ、飯沼慾斎著『草木図説』の1200点余より多く、少なくともこの2大著に並ぶ著作といえよう。

ただし、『草花図譜』は完成した著作ではない。

表4で示した端本として残る『草花図譜』では図だけで説文（説部）が無い場合が多いが、『雑纂』および一連の資料集『錦窠図譜』で見出した799点では、約7割で図と説文がセットになっている。思うに、庄左衛門はまず図を描き、のちに説文を順次加えて「図説」を目指したが、すべてに説文を添えるまでには至らなかった。

また、端本の内題や『雑纂』に数点残る目録の題をみると、「山草」「湿草」「蔓草」などの語句があるので、飯室庄左衛門は伝統的な『本草綱目』の分類――山草・芳草・湿草・毒草・蔓草・水草・石草の順にしたがって草類を配列しようとしたらしい。しかし、水草や石草の事例が『草花図譜』の端本や『雑纂』に少ないので、そこまで筆が及ばないうちに世を去ったように思えるのである。

7　『万香園裡花壇綱目』巴戟天～升麻部

本書は富山藩主の万香亭前田利保の著作で、『本草綱目』に所収されている山草類と湿草類を同書に従って配列し、それぞれの尋常品（普通品）および花の色彩や葉の形状などが尋常品と異なる品々を詳しく記述している。「花壇綱目」とあっても園芸書ではなく、万香亭が自園に栽培していたとの意とさ

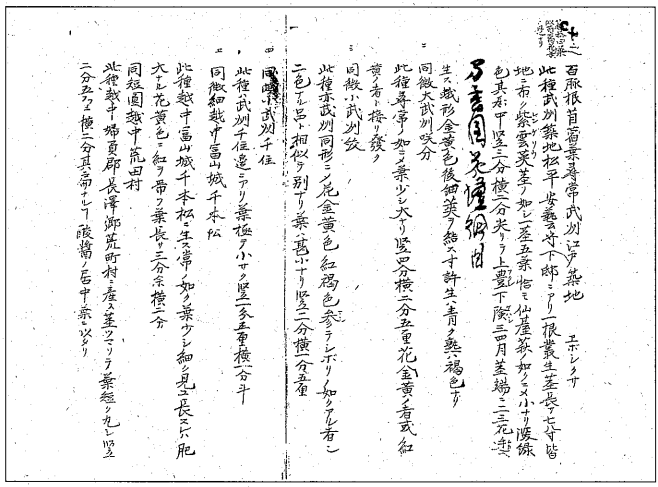


図５　前田利保著『万香園裡花壇綱目』の「百脈根」項（雑纂冊164）：百脈根はミヤコグサ、品目番号「一」に「尋常」（普通種）を記し、「二」以下に形質の異なる品を挙げる。終から３行目の「同短円越中荒田村」の品目番号「六」が脱落。右から５行目の「万香園花壇綱目」は圭介の朱筆。

れる。この書の現存本はきわめて少なく、所在を確かめたのは国会図書館本（特1-3439）と旧宝玲文庫本（雑花園文庫蔵）だけである。この２本は内容が完全に同じ５巻本であるが、山草の巴戟天から升麻までが欠けている（注49）。

一方、『雑纂』には『万香園裡花壇綱目』の引用が方々にあるので、その部分を集めたところ、「巴戟天（ハゲキテン）・遠志（オンジ）・百脈根（ヒャクミャクコン）・淫羊藿（インヨウカク）・仙茅（センボウ）・玄参（ゲンジン）・地楡（チユ）・丹参（タンジン）・紫参（シジン）・王孫（オウソン）・紫草（シソウ）・白頭翁（ハクトウオウ）・白及（ハクキュウ）・三七（サンシチ）・黄連（オウレン）・胡黄連（コオウレン）・黄芩（オウゴシン）・秦艽（ジンギョウ）・柴胡（サイコ）・前胡（ゼンコ）・防風（ボウフウ）・独活（ドクカツ）・羌活（キョウカツ）・土当帰（ドトウキ）・都管草（トカンソウ）・升麻（ショウマ）」と、巴戟天～升麻の各項が一通り揃った（図５）。このうち、淫羊藿は品目１～30、丹参は品目１～27、白頭翁は品目１～25と一応整っていると思われるのに対し、遠志の項は１品目分にすぎないし、前胡は品目１～６と12を見つけたが、７～11は未発見である（注50）。このように復元はいまだ断片的だが、ここに至るまでの探索には骨を折った。今後『万香園裡花壇綱目』を検討される方が同じ苦労を繰り返さないように、細かすぎるようだが、判明した所在を表５に示しておく。

なお、奇妙なことに『万香園裡花壇綱目』既存本の項目は『雑纂』にまっ

表5　『万香園裡花壇綱目』山草・巴戟天～升麻部

括弧前は品目番号、括弧内は冊番号：たとえば、巴戟天の8～9（冊155）は、『雑纂』冊155に巴戟天の品目8～9があることを示す。「付」は各項末の付言、「？品名」は　品目番号不明（すべて1件）。所属不明は「品目番号・品名（冊番号）」の順。

漢名	品目番号（『雑纂』冊番号）
巴戟天	1～7（別11-13冊3）、8～9（冊155）、10（冊109）、付（冊72）
遠志	?仙台ハギ（冊245）
百脈根	1～6（冊172）
淫羊藿	1～30·付（冊11）
仙茅	1～3（冊200）、?桔梗蘭（冊208）
玄参	1～10（冊167）
地楡	1～12（冊60）、?ヲランダヂユ（冊237）
丹参	1～27（冊187）
紫参	1～4（冊12）、5～6（冊21）、7（冊175）
王孫	1～16（冊88）、17～18（冊172）
紫草	1（冊39）、5（冊51）
白頭翁	1～25（冊223）
白及	1～7（冊218）、10（冊134）、?～?（冊80, 2件）
三七	1～3（冊195）
黄連	1～30·30*～34·付（冊61）
胡黄連	2（冊82）、3～5（冊97）、?胡黄連（冊138）
黄芩	1～2（冊62）、3～12（冊91）
秦艽	1～7（冊233）、8～15（冊100）
柴胡	1～3（冊193）、4～6（冊39）、7～10（冊193）、11（冊80）、?北柴胡（冊245）
前胡	1～6（冊193）、12（冊193）
防風	1（冊32）、2～4前半（冊18）、4後半～5（冊229）、6～7（冊22）
独活**	1～4（冊123）
羌活**	1～3（冊123）
土当帰**	1（冊123）
都管草**	1（冊123）
升麻	1～32（冊231）、34～35（冊51）、35*（冊132）、36（冊229）、37～48·48*～51（冊64）
所属不明	7芸蒿（冊164）、?大車草（冊208）

* 番号が重複

** 独活から都管草までは連続している。

たく引用されていないので、伊藤圭介が入手したのはこの巻だけだったらしい。

8　『人参培養説』

伊藤圭介は、文政10年（1827）6月25日に宇田川榕菴らと江戸を出立して日光に赴き、採薬した（注51）。その折、朝鮮人参について村人にいろいろと聞き、それをまとめて、閏6月5日に鉢石（はついし）（神橋東南の旅館街）の旅宿で記したのがこの小文である（冊35）。「日光‥‥の旅宿で圭介は処女作『人参之説』を著したと伝えられるが、いまその内容は知ることができない」（注52）と述べられているものに当たる。ここでは、前書きと本文の冒頭および最終部を再録しておく。振仮名は、片仮名が原本にあるもの、平仮名はいま加えたもの。読みやすいように、下線も付した。また、本号表紙見返しの「清福図録」に、前書きと冒頭部の写真を掲げてある。

「日光人参培養説
日光采草之時、鉢石（はついし）村人ニ所聞ノ筆記也。此游同伴ノ人、宇田川榕菴翁、伊東玄朴、大坂屋四郎兵衛（薬品手板［書名］ノ撰者ニテ薬舗也）、足立樑亭也［足立栄建、榕菴の弟］。
文政丁亥［10年］閏六月五日夜録、於鉢石僑屋［＝旅館］和泉屋半右衛門錦窠」（以上、前書き）

「人参培養説　錦窠真逸録
伊藤圭介日光采薬ノ時、所記。
○花壇ノ作リ方　幅二尺五寸、長サ一間或二間アリ。花壇ノ間ノ路モ、ハバ二尺五寸ナリ。蓋ヒ（ヲ）ハ杉ノ三尺皮ニテ三枚フキ、下ノ骨ハリモノ三本、横三本ナリ。ヲシ竹シメ、花壇一間ニ百粒ヅツ種（うえ）ル。花壇ノフチ、大ヌキ（凡ソ四寸）ニテ縁トルナリ。蓋ヒハ高サ四尺斗（ばかり）ニテ雨ハトントアタラズ。水カケヌ様ニスルナリ。‥‥
‥‥‥‥‥‥　1丁半ほど省略　‥‥‥‥‥‥‥‥
○四年メニホル。夏土用半頃ヨリ十月迄ニホル。十月、第一ニホル。四年メニハ実ヲモツナリ。
○花壇十三間ニ一年五両モトレル。御用所ヘ収ムルニ、壹〆目、上ノ上二両弐分斗、上ノ中一両弐分斗、中‥‥（ママ）下ノ上三歩斗ナリ。ホリシママ、土ノツ

キタルノヲ上ル。是ヲ土根（ドコン）ト云。御役所ハ、イタガ［板荷］ト云処ニアリ。籠ヘ入テ、モチ行ク。
○製法［加工］ハ、御役所ニテ製ス。ソノ法、知レズ。然トモ、肉折レナドトテ製スルモノアリ。ソノ法、麦ヲ煮（に）タ湯ニテユビキ、ホス。又、ホイロニテ焙シ上ル。サマシテハ入レ、サマシテハ入レテ、漸々ニ乾スナリ。生ニテヲケバ蠹蝕（としょく）ス。
○人参ヲ作ルハ株ナリ。千本株ハ、四年目ニ五両モトル。
○三四月、芽出シ検分ト云アリ。御掘方廻レリ。又、ミナリ［実成］検分ト云モアリ。
○人参第一作ル村ハ、イタガ［板荷］、久我、ヲコノガ、長畑、コシロ［小代］、ヒキダ［引田］、大足［大芦］、瀬川、七里、等ナリ」

9　その他の新出資料

①『竺蘭鏡』（冊46）
竺蘭（ちくらん）、すなわちマツバラン35品を写生した彩色図譜。題箋風の紙片に「竺蘭鏡　宗亭画」とあるが、宗亭の身元・描画年代はわからない。『［竺蘭伝来］冨貴草』（嘉永元年刊）によると、東国で松葉蘭、上方は竺蘭、西国は箒蘭と呼んだというので、宗亭は上方の人かもしれない。マツバランの流行は天保年間から文久年間にかけてであり、その頃の著作か。
②『福寿草図譜』（冊159）
「田安府芸臺印」朱方印と「献英楼図書記」朱矩形印があるので、田安家旧蔵書。著者名は記さないが、筆跡から坂本浩然（注53）の著作と考えられる。序跋は無く、作成年は不明。フクジュソウ21品の彩色図説（図６）で、花銘と短い注記を付す。図譜表紙には、圭介が自筆で「［明治］十二年一月、花戸（かこ）［植木屋］内山冨次郎説書入」と記している。「是ハ武州北沢村車屋何某より出る。世上、車屋白ト名付。至て小草なれども白よし」などの付箋がほぼ全品に貼られているが、これが圭介から頼まれた冨次郎の書き入れであり、主として来歴を述べる。冨次郎は江戸の著名な植木屋内山長太郎・卯之吉兄弟の親族と思われ、明治９年（1876）に小石川植物園の園丁となり、のち園丁長となった（注54）。
③卯之吉所蔵福寿草図譜（冊160）
正式な題名は不明。前項資料と同じくフクジュソウ彩色図譜で、冒頭に「此福寿草ノ図ハ巣鴨ノ花戸卯之吉ノ蔵本ヲ借リテ写シ置ク」と、圭介の注が

図6　坂本浩然画『福寿草図譜』（雑纂冊159）：右肩に「三段咲　奇品　菊花ノ如シ」と記す。また、この図には写っていないが、東大小石川植物園園丁内山冨次郎の付箋には「三段咲　信州諏訪村産　文政年中出る‥‥」とある。

ある。描かれているのは15品で、花銘と「絞り石竹咲」「三段咲」のように特徴を短く記す。うち7品は刊本『七福神草』（注55）と同品別図、5品は『五福艸』と題する図集（注56）の写し。前文も『七福神草』の後記に少々手を入れたもの。前文の末尾に「栽花園・寿山園・清水亭」の名があるが、寿山園は内山卯之吉、栽花園はその兄長太郎の園号。

④『桜艸花形附』（冊196）

水谷豊文（ほうぶん）の自筆本で、124品のサクラソウの花を墨絵で描き、花銘と形状・花色を記す。豊文は園芸にも詳しく、国会図書館には『豊文（とよふみ）朝顔雑記』（特7-677）、『豊文（とよふみ）朝顔図譜』（特7-678）、『豊文（とよふみ）朝顔叢書』（特7-614）が残るし、自著『本草綱目記聞』（→注24）にも園芸品の花銘を多数挙げる。

⑤『資生圃百合図』（冊214～215；題は伊藤篤太郎命名）

資生圃は赭鞭会に属していた幕臣馬場大助（→注37）。明治の初年から圭介と親しくしていたクラマー（C. Kramer：注57）が、馬場の描いたユリ図譜を入手していて、それを圭介が借りて加藤竹斎（→注36）に写させた。『伊藤圭介日記』（→注3）の明治7年（1874）4月26日条と5月5日条にその件が出ており、竹斎に「早ク返し申度（たく）‥‥葉ハ彩色ニ及不申（もうさず）、花斗（ばか）り奉願候」と頼

んでいる。『雑纂』に残された図は、そのとおりに葉は一部しか彩色されていない（口絵４）。篤太郎は全49点と『雑纂』に注記しているが、いまは40点しか見出せない。また、原題、原図の総点数、作成年代などはわからない。

⑥卯之吉蔵芍薬図譜（冊228）

上記の③と同じく、植木屋内山卯之吉から借用して写したもの。シャクヤク15品の図譜で、彩色図に花銘のみ記す。著者・原題・作成年は不明。

⑦一枚刷

江戸時代の、新出あるいは伝存が稀な資料を挙げる。明治期の資料も多いが、省略した。

●「附子」（冊71）、岩崎灌園（注58）、文政２年（1819）春刊：白花トリカブトの線画と文。

●「尾陽あさがほ名寄鏡」（冊180）、橘五園香久美撰・龍鱗亭五嶺校、催主蕣露園美丸蔵板、140品の花銘、文政３年（1820）７月：名古屋の銘鑑は珍しいし、朝顔ブームの初期に当たる点でも重要な資料。

●「石斛蘭七五三」（冊45）、関根雲停（注59）画・水野校薫庵文、色刷、天保８年（1837）８月刊：セッコク15品の花銘と１品の図。その文によると、校薫庵は『草木錦葉集』の著者である幕臣水野忠暁の子息。

●「番鬱金」（冊33）、野田青葭（注60）文・石崎融済画、色刷、天保15年（1844）３月刊：前言を融済の父融思が記している。バンウコンは天保13年に蘭船が持ち込んだショウガ科の植物で、原産地は東南アジア。

●「白蒺藜、一名沙苑蒺藜、蛮名コロツタルラリア」（冊172）、山本亡羊考・山本渓愚（渓山）画、色刷、嘉永７年（1854）１月刻（注61）：文は亡羊門下の西村広休・川喜田政明・岡 安定・河辺尚志。

●「万年青間葉」（冊56）、催主竹葉堂、安政２年（1855）２月21～26日、於中橋自宅：斑入オモト36品の花銘集だが、開催地や竹葉堂の本名は不明。「間葉」は斑入を指すと思われる。

●「岩檜葉名寄」（冊１）、東都植木屋連中撰、万延元年（1860）８月：85品のイワヒバを形状から11類に分けて、花銘を記す（注62）。イワヒバ（巻柏）はシダ類の一種で山地の断崖などに生える。

●「万延元申歳浅艸寺境内於花荘万年青飾附銘」（冊56）、下谷・浅草・本所有益家中、万延元年（1860）９月20・21日：オモトほか計241品の品評会。

●「鳳凰龍」（冊56）、オモト１品の色刷、京都蘭香軒、文久元年（1861）秋刊：これに類する奇品の一枚刷は、他にも幾つか所収されている。

10　おわりに

最後に『植物図説雑纂』全体について一言記しておきたい。

本書でもっとも多く用いられているのは、伊藤圭介の師である水谷豊文の『本草綱目記聞』（→注24）で、主要項目の大半にその記述が引かれている。それも単なる文献の一つというより、『雑纂』の骨組みとなっているように思われる。そのほか、豊文の号鉤致堂を略して「鉤」と圭介が記した図が方々に見られる。

また、大窪昌章の印葉図が目立つ。数えてはいないが、総計数百点は使われている。昌章は圭介と同世代（昌章が1歳年長）で親しかったから、圭介は昌章から多数の印葉図を貰っていただろうし、その印葉図は群を抜いて優れていたので、『雑纂』に数多く所収されているのも当然と思える。

よく引かれている文献に幕臣岩崎灌園の『本草穿要』『綱救外編』がある。前者は草木の形状・産地・採集時期に詳しく、後者は『本草綱目』『救荒本草』に所収されていない品の注解という特色がある。灌園の主著『本草図譜』は注記が短いことと図の転写に労力を要するからか、所収されてはいるが、数は多くない。

そのほか使用頻度の高いものに、『草花図譜』（飯室庄左衛門）、『喜卉園随筆』（横井時敏）、『百花天工区別』（朝倉義方）、『屋漏堂花譜』（村井長世編）、『常陸物産誌』（木内政章）、『大和本草会識』（小野蘭山講義録）、『草木名鑑』（→注28）、『花名集』（→注27）、『動植名彙』（伴　信友）、漢書の『植物名実図考』（→注26）などがある。このうち、『百花天工区別』『草木名鑑』『常陸物産誌』などは伝本の少ない資料（注63）である。『花名集』はいままで知られていないと思われ、著者も作成年代もわからないが、園芸品種の花銘などもかなり挙げており、注目される資料である。

『雑纂』には伊藤圭介宛の多数の書状が含まれており、交流関係を知る上でも役立つ資料であるが、その面は本稿で取り上げなかった。書簡については、圭介の日記とともに土井康弘氏が調べられているので、その成果を待ちたい。

圭介が『植物図説雑纂』の編纂をいつ頃から志したのか、それも知りたいことの一つであった。そこで『雑纂』にその時期を示す記述が何かないかと探したが、結局手掛かりは得られなかった。ただ、『幕末洋学関係手控』によると、文久3年（1863）には飯室庄左衛門の『草花図譜』の入手・転写をはじめている（注64）ので、遅くとも文久元年～3年（1861～63）の蕃書調所出役時には編纂に取り組みはじめていたようである。

「陸続、増補スベシ」と圭介から後を託された孫の伊藤篤太郎がどの程度手を加えたかにも注意を払ったが、篤太郎は最低限度の増補しかしていない。篤太郎は祖父圭介を厚く尊敬していたので、出来るだけ祖父が残した姿のままにしておきたかったのだろう。誤った個所に挿入されている「ラ」や「メ」の部を本来あるべき場所に移すのは容易なのに、その入れ替えさえしていないのである。また、圭介没後の近代植物学資料を加えると大変な量になるし、江戸時代とは異質なものになってしまう――それも考慮したのであろう。ともかく『雑纂』は「伊藤圭介編著」であり、「篤太郎増補」とまでは言えない。

といっても、篤太郎が何もしなかったわけではない。絵図の描き手や文の著者が誰か、篤太郎はしばしば注を付しており、それによって、圭介自身が描いた図、あるいは宇田川榕菴や水谷豊文の自筆図などとわかる場合が少なくない。珍しい資料や馴染みが薄い人名には、1頁近くを費やして解説していることもある。これらの記述が私たちには何より有難い資料になっており、この点で篤太郎は後世に大きく貢献した。

『雑纂』は草類が対象なので、姉妹編の資料集『錦窠禾本譜』『錦窠羊歯譜』『錦窠蘭譜』『錦窠菌譜』にも目を通した（→表1）。その構成や使用文献などは『雑纂』と大差はなく、新出資料が含まれる点も同じである。ただし、これらの錦窠図譜の場合、圭介は大筋を作っただけで、篤太郎が後を受けて整理したことが明らかであり、圭介・篤太郎の共編と言ってよいだろう。一方、『錦窠禽譜』『錦窠魚譜』『錦窠蟹譜』は、対象の違いから使用文献がかなり異なるし、『雑纂』にくらべて新出資料は少ない。しかし、圭介が動物の資料も積極的に収集したことが明らかで、『雑纂』とは異なる意味で参考になる点が多々ある。いずれも別の機会に、詳しく報告したいと考えている。

謝　辞

『植物図説雑纂』の調査は、国立国会図書館古典籍課の方々のご理解とご協力なしには進められなかった。また、岩佐吉純氏、土井康弘氏、安田 健氏、ならびに名古屋市東山植物園の横山 進氏から数々のご教示を受け、関連資料も提供していただいた。この場を借りて、各位に心から御礼を申し上げたい。

注　記

（1）国会図書館には、伊藤圭介編『植物図説雑纂』と題する資料が2件所蔵されて

いる。第一は本稿で取り上げる別6-9本254冊、第二は別11-33本17冊で、後者は別6-9本『植物図説雑纂』（草類）と『錦窠植物図説』（別11-13：木類）に分けて収納すべき資料が、部分的にはまとめてはあるが、全体としては未整理のまま綴じ込まれているもの。本稿では、別11-33本は扱わない。

（2）本稿では、引用文の漢字と仮名に現行字体を用い、濁点・句読点・振仮名を適宜加えた。引用文中の（　）は原注、〈　〉は原本の振仮名、□は判読できなかった字、【　】は脱字・送り仮名の補足、［　］は磯野による注か補足である。仮名が続くとき、花名などに下線を付して読みやすくした場合もある。また、『植物図説雑纂』別6-9本には『雑纂』の略号も用い、『雑纂』原本の冊番号はイタリックで示して分冊後の現番号と区別した。なお、本稿中の年齢はすべて数え年である。

（3）伊藤圭介については：杉本 勲、『伊藤圭介』（人物叢書46）、吉川弘文館、1960年。吉川芳秋、「伊藤圭介」、『医学・洋学・本草学者の研究』、八坂書房、1993年。土井康弘、『幕末尾張藩洋学者伊藤圭介の研究』、明治大学大学院2002年度博士論文。圭介文書編集会編、『伊藤圭介日記』、名古屋市東山植物園、1～9集、継続刊行中。

（4）明治新政府は明治元年6月に幕府の昌平坂学問所を復興して昌平学校を置き、後に大学校、ついで大学と改称した。教育機関兼文教行政機関であったが、明治4年7月には大学を廃止して文部省を置いた。圭介はこれに伴って、文部省所属となる。

（5）伊藤圭介の文久2年5月22日付家族宛書簡（書簡集、国会図書館、特7-646：注3土井報文、第6章61号書簡）。

（6）伊藤篤太郎については：上野益三、『薩摩博物学史』、島津出版会、1982年。北村四郎、「伊藤篤太郎」、『花の研究史』、保育社、1990年。吉川芳秋、「伊藤篤太郎」、『医学・洋学・本草学者の研究』、八坂書房、1993年。土井康弘、植物学者伊藤篤太郎の生涯、科学医学資料研究、31巻2号、2003年。篤太郎は、一時「篤」とも名乗った。

（7）注6上野報文。

（8）伊藤篤太郎、伊藤圭介翁と小石川植物園、『東京帝国大学理学部植物学教室沿革』（小倉 謙編）、東京帝国大学理学部植物学教室、1940年。

（9）長男圭造（桜斎）は安政4年（1857）に、次男廉次郎は乳児のときに、それぞれ死亡したので、謙が跡取りだった。

（10）伊藤篤太郎・松村任三、琉球植物誌（英文）、東京帝国大学理科大学紀要、12巻、1898年。

(11) 名古屋大学附属図書館の『伊藤文庫図書目録』(1956) によると、同館所蔵の『錦窠植物図説』の各冊小口に示されている原本巻番号のもっとも大きい数は162であり、全162巻と推定される。ただし、巻99と巻162は2冊に分冊されているので、冊数としては全164冊となる。

(12) 帝国図書館が『植物図説雑纂』を篤太郎の妻から寄贈されたのは昭和19年3月22日で、同日に伊藤圭介・篤太郎旧蔵書を購入しているが、伊藤文庫を構成しているのは購入分だけで、事務上の措置からか、『植物図説雑纂』別6-9本は同文庫に入っていない。

(13) 吉川芳秋・東山植物園、『理学博士男爵伊藤圭介翁遺品調査鑑定報告書』、名古屋市東山植物園、1968年。該当個所：1頁、11頁。

(14) 『植物図説雑纂』に捺された印「伊藤きやう氏寄贈本」の「きやう氏」が伊藤篤太郎夫人の京子であることは、名古屋市東山植物園の横山 進氏のご教示による。

(15) 国会図書館古典籍課の記録による。

(16) 分冊後の冊90と冊216の扉に、原本冊*110*を冊*51*に合冊した旨の書き入れがある。この合冊により、「タ」部の個所に「メ」部が入るという奇妙な配列になった。

(17) 東山植物園所蔵本と国会図書館本のそれぞれに所収されている「ミ」部の項目の番号を比較して、前者が原本冊*113*に相当することを確かめた。→付録末尾項

(18) 国会図書館蔵『錦窠植物図説』(別11-13) は11冊で、その冊1～8は原本巻1～8、冊9は原本巻10に相当する（原本巻9は東北帝大にいた頃に失ったらしいと、篤太郎が巻10表紙に記している)。冊10・11は「錦窠植物図説」の題箋をもつ別資料である。冊10は樟科で、題箋に記した巻番号「百十二」を紙を貼って消してある。名古屋大学附属図書館刊『伊藤文庫図書目録』(→注11) によると、同館蔵『錦窠植物図説』では原本の巻112の個所が欠本で、その前後は樟科であるから、上記の冊10は『錦窠植物図説』原本巻112と考えてよいだろう。一方、冊11の内容はアシ類（イネ科＝禾本(かほん)科）なので、本来は『錦窠禾本譜』に入るべき資料である。

(19) 名古屋大学本には、「孫伊藤篤太郎ニモ嘱托。但シ本家ニ保存ニ関シ、注意ヲ要スル件ノミ」などと表紙ほかに、圭介が書き込んでいる。ここに「本家ニ保存」とあるので、伊藤本家の側は『錦窠植物図説』を篤太郎に渡さなかったのではないか。

(20) キはイ、エはヱ、オはヲに合併。メは冊90、ラは冊137に混入している。また、現在は冊126（ウの部）→127（ノ）→128（ノ）→129（ウ）→130（ノ）であ

り、「ウ」と「ノ」の配列が混乱しているが、これはラベル記入の際の誤りに起因する。正しくは、冊126（ウ）→129（ウ）→127（ノ）→128（ノ）→130（ノ）の順である。全冊の植物名一覧表が国会図書館古典籍課にあり、また『伊藤圭介日記』8集（→注3）に河村典久が同様のリストを掲載している。後者には、別11-33本（→注1）と東山植物園所蔵本も所収されている。

(21)「孫伊藤篤太郎ニ嘱托」の貼り紙が残存しているのは10冊（冊1・54・58・96・98・107・117・144・173・244：原本で冊*1*・*32*・*34*・*54*・*55*・*60*・*65*・*78*・*91*・*126*に相当）、「尾張伊藤圭介之記」印が明確に読めるのは7冊（冊100・111・113・146・157・162・175：原本冊*56*・*62*・*63*・*79*・*84*・*86*・*92*に相当）にすぎない。

(22)『雑纂』寄贈時に篤太郎所蔵の未使用刷題箋が付属していたのではないかと思うが、冊151末尾に残る未使用刷題箋から複製を作成した可能性もある。

(23) 実例として、冊60のワレモコウ（地楡）の場合を挙げてみる。引用文献は計43点で、配列順に『草花譜』『百花天工区別』『花名集』『常陸物産誌』『屋漏堂花譜』『多識編』『動植名彙』『大和本草会識』『名物撫古小識』『倭名類聚鈔』『新撰字鏡』『本草和名』『医心方』『類聚名義抄』『色葉字類抄』『運歩色葉抄』『尺素往来』『延喜式』『薬品名彙』『義島県志』『救荒本草啓蒙』『箋注倭名類聚抄』『本草綱目纂疏』『節用集』『和歌本草提要』『蝦夷草木図』『本草綱目記聞（水谷豊文）』『百卉存真図』『本草穿要』『紀南六郡志』『本草図譜（岩崎灌園）』、『万香園裡花壇綱目』『日本地誌提要』『万葉名物考』ほか。一方、図は計26点。そのうちには『草花譜』の原図5点、服部雪斎の原図1点（以上彩色図）が含まれる。印葉図は計11点で、大窪昌章の2点のほか、圭介作成らしい6点など。

(24) 水谷豊文の『本草綱目記聞』は60冊で、伊藤圭介・篤太郎旧蔵の豊文自筆本は杏雨書屋に現存し、国会図書館には部分的な転写本（W391-21、26冊）がある。『本草綱目』に従って草木を配列するが、「桜品」「救荒」「歯朶」など、独自の仕分けもしている。方言や形状・生態については小野蘭山著『本草綱目啓蒙』の記述を基礎にしているが、尾張や美濃の方言・産地、自己の観察などを大幅に加え、多くの写生図・印葉図も入れた大作である。『雑纂』ではその文章部と写生図を別々に引用している。引用に当たっては『本草綱目記聞』の名を記さないが、ときに「鉤」の略号を添え（鉤致堂が豊文の堂号）、また記述様式や『国薬須知』を引くことが多いという特色から、『記聞』の引用とわかる。国会図書館蔵の『豊文図纂』（W391-5、4冊）はその山草部、『本草図譜』（特7-220、2冊）は毒草部の転写である。

(25) 大半は自筆だが、転写例も多少ある→注45、本文6節

(26) 清国呉其濬著。原本（1848年初刊）を、小野職愨が『重修植物名実図考』と題して明治16年（1883）に翻刻した。序は伊藤圭介。切り抜かれているのはこの明治本。

(27) 著者不明。『花名集』は『国書総目録』に記載が無い。上部に花名を、下部に細行で形状などを記し、園芸品の花銘も多数挙げるのが特徴。

(28)『草木名鑑』は柏木冨長原著／同喜康・同冨潤増補で、東京国立博物館と名古屋大学附属図書館伊藤文庫に所蔵されており、前者は天保元年（1830）増補本、後者はさらに安政元年（1854）に増補した本である。喜康（粂次郎）は兄、冨潤（吉三郎）は弟、冨長は兄弟の義父で、みな江戸の植木屋であった（平野 恵、植木屋柏木吉三郎の本草学における業績、MUSEUM、577号、2002年）。

(29) 磯野直秀、筆録本『蘭畹摘芳』、慶應義塾大学日吉紀要・自然科学、17号、1995年。

(30) 伊藤圭介著・伊藤 謙編、『日本植物図説』草部イ初編、花繞書屋蔵版、1875年。これまで1874年序刊とされてきたが、『伊藤圭介日記』によると初刷が出来たのは明治８年４月13日である（幸田正孝、尾張伊藤圭介著・男謙編次『日本植物図説』について、『伊藤圭介日記』、９集、2002年：→注３）。この「イ初編」の草稿や校正刷などが『雑纂』「イ部」の各所に所収されている。二編以降は刊行されなかったが、「イ二編」の版下や校正刷が『植物図説雑纂』別11-33本の冊１に残る。

(31)「花史雑記」は『東京学士会院雑誌』の第３編（1882）から第19編（1897）まで連載され、計123項目の植物について記している（佐藤達策、伊藤圭介晩年の著作「花史雑記」について、『伊藤圭介日記』、９集、2002年：→注３）。

(32) 幕末に渡来した異国植物の記事、とくに文久２年（1862）12月帰国の遣欧使節が持ち帰った園芸植物の種子や球根とその発芽・生長についての記述が少なくない。

(33)「山草鉤」「鉤」など、豊文の堂号「鉤致堂」の「鉤」と記す。

(34) 圭介の筆跡から確認できる。

(35) 服部雪斎は幕末から明治初期にかけて活躍した博物画家。武蔵石寿の大著『目八譜』（1845序）をはじめ、『本草綱目啓蒙図譜』（1849刻）、『朝顔三十六花撰』（1854刊）、『華鳥譜』（1861成）などの図を描いた。明治５年に博物局の画家となり（東京国立博物館編、『東京国立博物館百年史』、59頁、1973年）、博物局編『動物図』、文部省小学掛図『博物図』、伊藤圭介著『日本産物誌』の図などを描いた（児島 薫、「服部雪斎」、『幕末明治の画家たち』、ぺりかん社、1992年）。『雑纂』には雪斎印のある彩色図が100近く含まれる。圭介とは、圭介が

江戸にいた文久２年（1862）前半までに知り合っていた（伊藤圭介日記、文久２年６月21日条→注３）。　→口絵３

(36) 加藤竹斎は明治６年（1873）には圭介と知り合いになっており（伊藤圭介日記、同年５月25日条→注３）、のち小石川植物園付の画家となったのも圭介との縁からかもしれない。『雑纂』には竹斎の図が多いが、原画はほとんど無く、転写した図が大半を占める。

(37) 馬場大助は旗本で、赭鞭会の一員。名は克昌、通称大助、字仲達、号資生・紫欄、筑前守。明治元年（1868）没、年84。絵がうまく、『群英類聚譜』『遠西舶上画譜』などの大作を残した。

(38) 宇田川榕菴は津山藩医、『植学啓原』により近代植物学、『舎密開宗』により近代化学を紹介した。圭介は文政10年（1827）に出府したとき榕菴に学び、ともに日光で採薬した（８節『人参培養説』参照）。

(39) 印葉図は魚拓と同様の手法により草木の葉・花・実・根などの拓本を作ったもので、尾張の博物家が得意とした。江戸時代に作成されたのは、植物体（腊葉、すなわち押し葉でもよい）に墨を塗り、紙を上に載せて圧する直接法で、葉脈や微細な毛まで写せた。一方、間接法は資料に薄い紙を載せ、少し湿らせて密着させ、墨をつけたタンポで上から叩く方法で、明治期に使われた。『雑纂』には、伊藤圭介が間接法で作った印葉図も多い（河村典久、我が国の印葉図譜について、慾斎研究会だより、59号、1992年）。

(40) 大窪昌章は尾張藩士で嘗百社の中枢の一人だった。名は昌章（まさあき）、通称舒三郎、号蓒荔菴（へいれいあん）（父と子息も同号）・蝸牛菴。天保12年（1841）没、年40。印葉図作成に巧みで、多数の印葉図集が残り、優れた採薬記もある。なお、『雑纂』中にある昌章の印葉図と同一資料から同時に作られたと思われる印葉図が、東京国立博物館蔵の大窪昌章印葉図集『草木摸真』にかなり存在している。

(41) 牧野富太郎から伊藤圭介への質問と返答は、冊166･198･233や『雑纂』東山本、『植物図説雑纂』別11-33本の冊９に残る。

(42) 国会図書館蔵『花史雑記』（245-50；転写本）に所収されている伊藤圭介著、「本邦博物起源沿革説」の飯室庄左衛門の項の末尾に、「安政五戊午十一月」に没したとの書き込みがある。誰が記したかはわからないが、ほかの書き入れから当時の事情に詳しい人物と思われる（磯野直秀、日本博物学史覚え書Ⅻ、慶應義塾大学日吉紀要・自然科学、31号、2002年）。

(43) 赭鞭会は富山侯前田利保（万香亭）・浅香直光（青洲）・飯室庄左衛門（楽圃）・大坂屋四郎兵衛（清雅）・佐橋兵三郎（四季園）・設楽（しだら）市左衛門（妍芳）・田丸六蔵（霊槐・寒泉）・馬場大助（資生）・武蔵孫左衛門（石寿）・絵師関根

雲停ほか数名から成り、メンバーが資料を持ち寄って討議する本草の研究会であった。天保7年（1836）頃から天保11年（1840）までの記録が残る。万香亭・大坂屋・雲停以外はみな幕臣（平野 満、天保期の本草研究会「赭鞭会」、駿台史学、98号、1996年）。

(44) 飯室庄左衛門の字には、次の特徴がある：(1)「竹」の左側が「イ」になる、(2)「其」の左上の縦棒が出ないことが多い、(3)「出」が「虫」の崩し字のようになる、(4)「羊」や「美」の上部が「ハ」になる、(5)「雁」の内部が「佳」になる、(6)「ミ」が「三」のようになる、(7)「ナ」が「十」のようになる、(8)「ハ々コクサ」など、「々」を片仮名にも用いることが多い、等々。

(45) 表4と『雑纂』中に多少残っている版心柱記の巻番号から『草花譜』は10数冊程度の資料と推察されるし、本文の所収品目も充分整理されていない上、説部を欠く例が大半を占める。これに対して『草花図譜』は巻番号から少なくとも40数冊が存在することが確実だし、各項に類似品目を数多く記載する、図部と説部の両者をもつ資料が多いなどの点で、より充実している。したがって、『草花譜』を増訂したのが『草花図譜』と考えている。なお、表4の資料（2）にある「草花説」の内題は他ではまったく見られないが、飯室庄左衛門は一時期この題を用いたのかもしれない。

(46) 名古屋市東山植物園蔵『植物図説雑纂』「ミの部」（原本冊*113*）に『草花図譜』の図は含まれていない。

(47) 『雑纂』中の『草花図譜』734点のうち78点は転写である。その転写に用いた用紙は四周単辺角トリで、版心の上部に左右対称の渦巻模様（人の眼のように見える）を入れた独特の用箋であり、『草花図譜』とは無関係の資料にも使われている。上記用紙に描かれた図の品名や説明文の筆跡は飯室庄左衛門以外の複数の人物の筆跡であって、明らかに転写と判断される。また転写の多くは図だけの転写で、説文を欠く。『雑纂』以外の資料には転写図は無い。

(48) 『菊花図譜』が飯室庄左衛門の自筆であることは、土井康弘氏が最初に気付かれた。

(49) 国会図書館本の各題箋には「寒泉園」の朱楕円印が捺され、「一」～「五」の巻番号が記されている。この号は幕臣田丸六蔵のもので、田丸は富山侯前田利保が主導したとされる赭鞭会（→注43）の一員であった。したがって、田丸は同侯から直接に原本を借りて写したと思われるが、そのとき山草の「巴戟天～升麻」部は利保の手元に無かったことになる。

(50) 『万香園裡花壇綱目』は『雑纂』の思いがけない個所に1～2項が引用されていて偶然に気付いたことも何回かあったので、見落としている事例もあるかも

しれない。また、名古屋大学蔵の『錦窠植物図説』に使用されている可能性が残る。

(51) 幸田正孝、宇田川榕菴の年譜（上）、津山高専紀要、29号、1991年。該当するのは、「榕菴年譜」文政10年6月25日条の注。

(52) 注3杉本報文、42頁。

(53) 坂本浩然（こうねん）は紀伊藩医、画家。名は直大、通称浩然、字桜宇、号浩雪・蕈渓ほか。紀伊藩医坂本純菴の長男で、坂本純沢（永斎、復元）は実弟。嘉永6年（1853）没、年54。刊本のキノコ図譜『菌譜』のほか、未刊の『菊譜』『群桜花譜』『百合譜』『桜草勝花品』『躑躅譜』『牡丹花譜』『竹譜真写』『琉球草木写生』など、草木の図譜を数多く描いたが、国会図書館伊藤文庫の6点――『菌譜』筆写本2点および上記『躑躅譜』以下の4本はみな田安家の旧蔵書であり、『福寿草図譜』と体裁も共通する。浩然は田安家の依頼で絵筆をとることが多かったようである。　→磯野直秀、日本博物学史覚書Ⅲ、慶應義塾大学日吉紀要・自然科学、35号、投稿済。

(54) 小倉 謙編、『東京帝国大学理学部植物学教室沿革』、東京帝国大学理学部植物学教室、1940年。該当するのは37、199頁。

(55) 国会図書館蔵『七福神艸』、特1-565。後記の末尾は「群芳園弥三郎・栽花園長太郎・帆分亭六三郎」で、花戸名が卯之吉所蔵『福寿草図譜』とは異なる。

(56) 東洋文庫蔵『雪蓮図』（XV-3Bb-39）所収の「五福艸」は転写であるが、底本は一枚刷の可能性もある。

(57) 篤太郎は「ベルギーの園芸家で、横浜に住んでいた」とつねに記すが、イギリス人で文久3年（1861）に来日し、横浜で園芸関係のクラマー商会を開いた人物（鈴木一郎、『日本ユリ根貿易の歴史』、私家版、1971年）ではないか。

(58) 岩崎灌園は幕臣。名は常正、通称源蔵、号灌園、堂号又玄堂。主著は『本草図譜』、ほかに『草木育種（そだてぐさ）』と『武江産物志』が名高い。天保13年（1842）没、年57。

(59) 関根雲停は服部雪斎（→注35）とならんで、幕末・明治初期の博物画の第一人者だった。江戸に住み、奇品草木の2図譜『草木奇品家雅見』と『草木錦葉集』の図の大半を描き、赭鞭会にも参加したことで知られる。明治10年（1877）没、年74（田中芳男、雲停翁小伝、博物雑誌、1号、1879年）。

(60) 野田青葭は長崎の薬目利（めきき）で、山本亡羊（→注61）の弟子。嘉永3年（1850）に舶来草木10品の色刷図説『拾品考』を刊行。

(61) 山本亡羊は京都の本草家、名は世孺、通称永吉、字仲直、号亡羊。小野蘭山の高弟で、山本読書室の創始者。著作は『百品考』（天保9・嘉永元・6年刊）

など。安政6年（1859）没、年82。山本渓愚は亡羊の六男。名は維慶、通称藤十郎、字章夫、号渓山・渓愚、家号海紅亭。なお、コロツタルラリアは中国南部などに産するキバナハギである（北村四郎、『植物文化史』、p. 190、保育社、1987年）。渓愚の著作『本草写生図譜』（雄渾社、1981年）に本図の改写がある。

(62) 翻刻→白井光太郎、いはひばの栽培、『白井光太郎著作集 Ⅲ』、科学書院、1986年。

(63) いま一つ例を挙げると、稀に引かれている『中国譜志』という資料がある。幸い国会図書館に所蔵されている（110-108、11冊）ので調べてみると、享保元文期の『尾張藩産物帳』（完本は名古屋市博物館蔵）の異本で、品名一覧の部分は抄録だが、尾張・美濃の絵図部分はすべて転写されている。『中国譜志』は編者も編集時期もわからないが、伝存の稀な資料。矢野宗幹が「産物帳らしい」と指摘している（方言研究、5輯、1942年：安田 健氏のご教示による）が、これまで詳細は知られていなかった。『雑纂』調査の予期せぬ収穫であった。

(64) 国会図書館蔵、『幕末洋学関係手控』、YR-164、1軸。伊藤圭介の書状覚え書で、その文久3年（1861）11月20日の分ほかで飯室庄左衛門の『草花図譜』に触れている。

付録　『植物図説雑纂』別6－9本に所収されている主要資料・記事（左端の数字は冊番号である。また、書簡の大半は除く）

①【　】：同一資料のある冊番号で、最初の項にだけ記す。
②　→：関連する資料がある冊番号を示す。
③「雪斎画」は、服部雪斎の印があるものを、気付いたかぎりすべて示した。
④「水谷記聞」は水谷豊文編著『本草綱目記聞』の略記。

冊1　篤太郎が本書を継承した時の書類、欠本リストなど
扉1ウ：製本を最初に行なったときの伊藤圭介の識語、明治9年
扉2オ：「伊藤篤太郎ニ与フ。陸続尚増補スベシ。明治十五年六月伊藤圭介記」、周辺に圭介印多数。青印中の「伊藤きやう氏」は伊藤篤太郎夫人の伊藤京子　→冊109
「岩檜葉名寄」、一枚刷、万延元年8月、東都植木屋連中、イワヒバ85品
2　「嘗百社盟約規則」、明治15年7月【7·15·70·153·168】
巻末：伊藤圭介印、多数：数丁にわたる　→1・6・243・253
巻末：「植物図説雑纂」題箋、校正刷か
4　『日本植物図譜』予約広告、郵便報知新聞、明治16年11月10日号（写）：伊藤圭介校閲・藤城重義編集、養喜園出版部：全120冊、48円（手彩版150円）
「巴威里亜（ババリア）貴族ヒリップ、フォン、シーボルト氏記念塔ヲ勧進スル記」、戸塚静海・伊藤圭介、明治8年9月：オーストリア王立農学会の決議に賛同する呼びかけ
6　雪斎、イチゲソウ図
嘗百社「明治二十年定期会出品課題」、明治19年12月【31】
「交友社博物会広告」、明治17年4月：同年5月11日、於桑名浄土寺　→冊243
嘗百社「物品会課題」、明治18年1月：毎月2回の物品会の主題一覧【13】
嘗百社の配布物：情報・資料提供依頼文、稿末「尾藩　嘗百社　石黒正敏・吉田高憲・水谷豊文・大窪昌章・大河内重敦・伊藤舜民」、天保3年以前

巻末：伊藤圭介印、多数
7　「嘗百社盟約規則」、明治15年７月
9　嘗百社「物品会課題」、明治17年１月【16･31】
13　嘗百社「物品会課題」、明治18年１月
嘗百社「明治十九年物品会課題」、明治18年12月
雪斎、エゾイタドリ図
14　雪斎、イラクサ図
15　「本草会会則」、京都本草会、明治25年８月：山本読書室物産会を継承【45】
「温知会申告」、明治11年10月：温知会規則、例会毎月第２土曜、於六三郎宅【138】
「嘗百社盟約規則」、明治15年７月
16　『富士登山の栞』、佐藤昇平著、活字本、10頁、図なし、年不明
嘗百社「物品会課題」、明治17年１月
18　手彩一枚刷「熊野産イチヤウラン」（淇川写画）：同一物２点、うち１点に「蓽荔菴原図」と書き入れ（蓽荔菴は大窪家代々の号）
19　「腊葉大略」の文の写し：腊葉製作法、著者・年不明
20　雪斎、イトナデシコ図
イハツツジの項：篤太郎注で「宍戸昌」とルビ
21　水谷記聞のツチヤマモチ図・ヤマテラボウズ図の写、豊文自筆ヤマウツボ図　→冊108
パマウツボの項に「伊藤篤太郎按、家蔵幾尼忽布氏印葉本草‥‥」
コモノタケの項に「伊藤篤太郎記‥‥按ニ此こものたけノ図ハ余ガ伯父中野月嶠（鍵太郎ト称ス、余ガ父ノ兄君ナリ）君ノ写生スルトコロナリ。君ハ‥‥伊勢菰野山採薬ニ同行シ、採薬目録入額ノ画ヲ描ケリ」とある。
23　巻末：「明治十年／七十五翁／伊藤圭介／書画記」の白方印に、自画像らしい墨絵略画を添え、「錦窠老人」と自署
24　琉球芭蕉紙の実物見本、「第一博覧会出品」
25　「天保十年ノ頃、阿蘭陀種ノ薄荷舶来ス」（重修本草綱目啓蒙、増補）
圭介注：「長嶋ノ朝倉義方ノ百花天工区別ノ説」（ハコベの項）
28　雪斎、ナツハギ図
30　雪斎、ハス図（珍しくスケッチ風の淡彩画２点）、嘉永３年６月25日写、「牡丹蓮、右栄達［井口栄達？］ノ説」との書き入れ

蓮の花銘リスト（写）30点、後半14点は「又日庵（ゆうじつあん）庭中」のもの
「蓮譜小箋」、「庚申季春、玉井堂誌／祇樹庵評」とある一枚刷、蓮22品
「白鮮、花戸吉三云、白鮮ハ田村元雄、漢渡ノ藥櫃ノ中ヨリ苗葉アル者ヲ捜出シ、栽ラレタルニ紀元ス。故ニ田村白鮮ト云リ」

31　嘗百社「物品会課題」、明治17年１月
嘗百社「明治二十二年定期会出品課題」、明治22年１月【134】
嘗百社「明治二十年定期会出品課題」、明治19年12月

32　ハナヂサ、「文久壬戌［２年］、箕作秋坪フランスより持帰」、同属別種２品

33　「番欝金」、野田青葭著・石崎融済画・石崎融思前言の色刷一枚刷、天保15年３月
雪斎、ハナカンザシ図

35　「人参培養説」、圭介が宇田川榕菴と日光で採薬した折、文政10年閏６月５日に作成した聞き書

36　野菜人参各種のスケッチ：花戸乙吉、寒泉（田丸六蔵）、四季園（佐橋兵三郎）などによる→冊78

40　雪斎、ホクシャ図
「ホクシヤ、阿蘭陀ノ産、江戸花戸ニテヒヨウタン花ト号ス。安政六未年渡来ス」（草木名鑑）

41　雪斎、ベンケイソウ図

42　雪斎、ヘスペリス・マリチマ図

43　雪斎、パンケレイ図
八重ドクダミ図

45　「錦蘭　長狭ノ山中ニ出ヅ、又鴉蘭トモ云。江戸ノ種樹家帆号ナル者（帆分亭森田六三郎）、之ヲ携テ京摂ノ間ニ至ル。彼地ノ豪富争買フ。其価、頓ニ貴シ。天保初年ノコトナリ」
花戸卯之吉、トケンラン図、繻子蘭図
「錦蘭見立六歌仙、浪花社中／南礎写」の６点の彩色肉筆画、年不明：国会特7-676本と同じ
「石斛蘭七五三、雲停写」一枚刷、セッコク15品の花銘と１図、天保８年８月：水野忠暁の実子交薫庵が文を記す
「交友社博物会広告」：年月日は空欄
「本草会会則」、京都本草会、明治25年８月

46　『笠蘭鏡』（宗亭画）、マツバラン35品の彩色写生図譜

竺蘭（マツバラン）色刷一枚刷、3品、「三陽［三河］玉青堂所持真写」、年不明

49　雪斎、竹化蘭図

「文久三癸亥二月朔日渡、仏朗西毬根類目録」：チューリップ26品の圭介メモ

雪斎、チューリップ図

50　雪斎、フデリンドウ図、マツムシソウ図

51　雪斎、亜麻図、白花リムナンテス図

55　雪斎、ナンバンギセル図

鎌井松石著「四季於茂飛草之図説」、ユウレイソウ・ナンバンギセルなど、4品：伊藤圭介宛に送ってきた原本（書簡形式）

56　「万年青愛翫広告」、東京駒込、五葉園主人、明治19年

「万年青共音会」、東京根岸、篠 常五郎、明治19年

「万年青間葉」、36品の花銘集、竹葉堂、安政2年2月21～26日、於中橋自宅

「万延元申歳浅艸寺境内於花荘万年青飾附銘」、56名の出品物241品（オモトほか）の大型一枚刷、万延元年9月20・21日、「下谷・浅草・本所有益（ウエキ）家中」

「藤波竜・多賀丸」、オモト2品の色刷、慶応3年7月、尾張国津□里芳心亭

「万年青しなさだめ」、浪華、オモト35品、文化6年2月転写

「鳳凰龍」、オモト1品の色刷、文久元年秋、京都蘭香軒

「龍鉾」、オモト1品の色刷、壬午1月、洛西中村氏

オモト銘鑑：明治16年、明治19年1月、明治21年

57　雪斎、オシロイバナ図

栗本丹洲、オシロイバナの説

59　引札：吉田雀巣庵追薦博物会、万延元年3月25日、於七寺（名古屋）、墨刷【217】

60　雪斎、白ワレモコウ図

66　伊藤圭介が11～12歳の頃に写したカタクリ図

68　雪斎、ヤブマオ図

70　「嘗百社盟約規則」、明治15年7月

71　柏木吉三郎「蓬莪朮」自筆画・自筆注記

宇田川榕菴自筆トリカブト画、2点

雪斎、トリカブト図、２点
「附子」、一枚刷、岩崎灌園、文政２年春：図「附子、白花之物」を含む
「製附子説」、岩崎灌園、文政９年冬、図ナシ：水谷記聞からの転写か
72　宇田川榕菴自筆、巴戟天図
75　雪斎、ガンゼキラン図
78　カブ14図：赭鞭会関係者の名が多出　→野菜人参図（冊36）
雪斎、カブ図、３点
79　「南瓜考」、秋田恭、文化７年８月：『蘭畹摘芳』次編７からの転写
雪斎、カボチャ図、３点
引札、本所緑町伊勢喜での虫干展示、「未八月」の15日より15日間
80　『含翠園物産会抄輯』の書袋：竹本要斎物産会、明治４年　→冊188・199
ウェインマン花譜からの宇田川榕菴自筆転写図：榕菴から圭介に贈ったもの
82　雪斎、ヨツバハギ図
83　煙草のラベル、多数
「銘酒煙草投票番付」、明治31年6月29日、毎日新聞附録
「煙草の長うた」、転写
「熏艸之記」、「安永三甲午年孟夏下幹、多賀氏常政識」→冊174
87　雪斎、オオケタデ図
88　雪斎、イヌホウズキ図
89　宇田川榕菴自筆ダンドク図
雪斎、ヤブマメ図
90　「タ」の部に、「メ」の部が混入：「タ」→「メ」→「タ」となっている
91　「蒲公英（タンポポ）競」、一枚刷、明治12年４月、東京北・有恵貴（うえき）連中、36品
93　赤大根（二十日大根）の種子袋（米国産、開封済）→109・112・202
94　雪斎、大黄図、ダイモジソウ図
95　雪斎、タムラソウ図、アザミ図
96　伊藤圭介著「番椒図説」（20品）、『洋々社談』、90号（1887）：増補版（51図）も添える
平賀源内著「蕃椒譜」の写し（51品）
99　栗本丹洲著「落花生」（仮題）、文政９年：『蘭畹摘芳』筆写本より転

写
尾張の花戸曽吉「91歳、元治元年」の記事がタマギクの項にある
101 伊藤圭介「蕎麦の説」、『農業雑誌』、348号
ソバの商品ラベル20枚ほど（方々に点在）
103 圭介注、「百花天工区別、此作者ハ長島藩ノ人カ」
104 賀来飛霞、ツリガネカヅラ写生図
106 巻末：「伊藤本家ノ秘書ニシテ禁出門外　錦窠老人」
108 ツキミソウに「宵待クサ（花戸）」と記す。
「マツヨヒクサ（京方言）弘化四丁未年、舶来ス」
ツチトリモチ関連記事：①ツチヤマモチの水谷写生図（2件）の写、②田中芳男、「ツチヤマモチ図説」（明治17年）、③藤野寄命のコメント（明治18年）→冊21
ツメクサ（クローバー）伝来の事情と和名の由来
109 扉：「伊藤篤太郎ニ与フ。陸続、尚増補スベシ。明治十五年六月　伊藤圭介記」→冊1
伊藤篤太郎「マメダホシの説」（「新愛知」紙、明治26年9月8日号）：マメダホシはネナシカヅラの方言
赤タマネギの種子・黄タマネギの種子が入ったままの袋（市販品）
110 引札「水谷助六先生追薦本草会　嘗百社　乙未三月十五日　於名古屋南寺町一行院」【201·252】
オジギソウ関連記事
111 七種粥の由来
112 「清国種水茄（ながなす）」の種子が入ったままの袋（市販品）：開封済の「清国種大茄（おおなす）」袋もあり
ナス漬物の商品ラベル、多数
113 雪斎、ナルコユリ図、2点
115 「瞿麦養方并秘法」、嘉永3年8月、松琴亭写
ナデシコ花銘、22品：『花名集』より
「黄花瞿麦、キナデシコ、天保十己亥始此種出ルヲ聞」
118 雪斎グラジオラス図、4点
119 雪斎、キケマン図
122 『群英類聚譜』（馬場大助）巻38のムカゴサイシン図・文の転写と、それに関連する設楽妍芳の文、天保3年8月9日
ムシトリナデシコ、「文久元酉アメリカ舶来‥‥アメリカ王不留行ト花

戸呼ベリ」
124　馬場大助、莪朮（欝金）原図
127　冊126（ウ）→127（ノ）→128（ノ）→129（ウ）→130（ノ）となっているが、正しくは冊126（ウ）→129（ウ）→127（ノ）→128（ノ）→130（ノ）：ラベルの貼り間違い
128　宇田川榕菴自筆？、ノコギリソウ図
129　曲直瀬正貞自筆画らしいウリクサ図、3点
130　雪斎、ヨメナ図、吹寄草図
弘化2・3年頃にノウゼンハーレンが持ち込まれたことの記事、数件
除虫菊関連記事：除虫菊種子の市販品袋（中味は無し）もある
132　水谷豊文自筆クマタケラン図
岩崎灌園「杜若考」（文化14）の写し：杜若は「青ノクマタケラン」の説
133　引札「葛晒元　冨田屋冨八」（安永9年12月）
134　嘗百社「明治二十二年定期会課題」、明治22年1月
136　雪斎、スズムシラン図
伊藤圭介、「沢瀉（オモダカ）ハ毒草ノ説」、『洋々社談』、41号
137　「ク」の部に、誤って「ラ」の部が入っている
雪斎、ラセンソウ図
138　「温知会申告」（明治11年10月）：温知会規則、例会毎月第2土曜、於六三郎宅
139　「棣棠花説」、伊藤圭介、『洋々社談』、58号
140　「琉球藍広告」、小冊子、染め見本付
141　ツチアケビ関連記事
伊藤篤太郎、ツチアケビについての投稿記事：東京絵入新聞、明治13年9月30日、10月1日、9日号（全部かどうか不明）
145　『錦窠翁耋筵誌』の書袋
147　雪斎、ヤグルマギク図
151　巻末：「植物図説雑纂」の未使用題箋、1枚
153　雪斎、豆類種子図（66品）：「雪斎文修」の署名がある
豆腐・味噌などの商品ラベル類
マツバボタン、万延元年アメリカより、文久2年フランスより渡来
マンテマ、嘉永5年渡来
「嘗百社盟約規則」、明治15年7月

155　雪斎、ノゲイトウ図

156　『[官板] 鴉片戒』、書袋付

開成学校化学上級生徒・久原躬弦稿「鴉片ノ害」

157　「古加葡萄酒」（横浜）広告パンフレット、12丁

設楽妍芳、「藿香」：楽善堂・万香亭らとの討議書簡

158　引札：医学館薬品会（年不明）

159　坂本浩然『福寿草図譜』：21品、「十二年一月花戸内山富次郎説書入」

160　栽花園・寿山園・清水亭編「福寿草図」（仮題）：15品、内山卯之吉蔵の転写、「七福神草」7品＋「五福艸」5品＋ほか3品、前書きは「七福神草」後書の改変

「福寿草ノ説」、伊藤圭介稿・伊藤篤増補、『工業新報』68号、明治13年1月10日

161　『菩多尼訶経』、明治12年2月版：翻刻人・伊藤篤太郎

164　「日本植物図説／巻之[redacted]／養喜園蔵板」の柱をもつ彩色図版「一種甲州産葡萄」2図　→冊4

「古加葡萄酒」「栗鼠印・機那葡萄酒」「薬用葡萄酒効能書」などの広告パンフレット

166　牧野富太郎からの質問（明治15年9月）と伊藤圭介の返答　→冊198・233・東山本

168　蒟蒻（コンニャク）商品ラベル類

「嘗百社盟約規則」、明治15年7月

169　『胡椒一味重宝記』の書袋

172　雪斎、仏種コスモス図

コスモス、文久2年、フランスより渡来

山本亡羊考・山本渓山画「白蒺藜、一名沙苑蒺藜、蛮名コロツタルラリア」、一枚刷、嘉永7年1月刊：録者は門下の西村広休・川喜田政明・岡安定・河辺尚志

173　雪斎、チョウセンアサガオ図

174　雪斎、丁字ナスビ図

「花かつみ之考」、多賀常政、安永9年6月上旬：田字草説、関連する資料（多賀の再考ほか）多数　→伊藤圭介編『花かつみ集説』（特7-464）

175　雪斎、「天竺牡丹単弁紅花」図

ダリア・カタログ、Catalogue des Dahlias, Paris, 1862：11頁

176 「大日本園芸品評会稟告」、明治26年、第3回大日本園芸品評会、於上野公園、列品館
飛燕草（デルヒニウム）、安政年間に渡来
177 浅草海苔などの商品ラベル
海苔製品の実物、数点
賀来佐之（佐一郎）発、圭介宛書簡「カモメキク」、年不明
雪斎、黄菊図
篤太郎注記、「箙屋（えびらや）ハ余ノ実父伊藤延吉（のぶきち）君ノ実家中野氏ノ屋号ナリ。名古屋末広町若宮神社［若宮八幡］前ニ在リ」
180 「大輪朝顔縦覧　小石川大塚仲町波切不動際　植春」、明治25年7月20日
「尾陽あさがほ名寄鏡」、文政3年7月：撰者橘五園香久美、蕣露園蔵板、140品
「朝顔名鑑」、明治22年8月、東都下谷坂本入谷植木屋：124品
「朝顔花合」、明治9年7月26日、大阪高津寿木園：撰者龝叢園、催主陽花館翁、51品
「朝顔飾付広告」、明治22年7月14日より、入谷ほか植木屋16名の連名
『穠久会記事』、6号、明治31年：会頭は伊藤圭介、会員名簿あり
『郵便報知新聞』、明治17年9月8日、黄花朝顔記事
『毎日新聞』、明治29年6月24・25日、「名人巡り――朝顔丸新」：「成田留次郎は当年73歳」「奇品の種子5粒1円50銭」などの記事あり
アサガオ押花：①紫5・薄紫2・赤3、②赤2
水谷豊文自筆、朝顔18品の特徴
嘗百社引札：「本草会　三月／九月十五日、於修養堂」
181 麻ガラ紙の実物、「麻ヲトリタル跡ノカラニテ所製」：ほかに「支那麻」紙あり
182 雪斎、ハナショウブ図
岩崎灌園述「杜若考」の写し　→冊132
『毎日新聞』「花菖蒲・吉野園」広告：明治31年5月28日号
『東京日日新聞』、「花菖蒲ノ枝折（シオリ）」：上と同日号
『東京日日新聞』、「堀切の花信」：堀切菖蒲園（小高伊右衛門）と武蔵屋の紹介、明治27年6月6日号
183 『花菖培養録』嘉永6年本の写し：彩色図とも
「花菖蒲番付」、3点、明治期
『毎日新聞』、「花菖蒲」（筆者、しうや）、明治29年5月、4回連載

「花菖蒲花銘」94品と「文化二丑五月、伊勢津平五郎ニテ見ル」12品：水谷記聞の写しか

184　芸州タレユヘ草をめぐる書簡、万香亭・丹洲・桂々嶼

187　「長崎から江戸に来た安産樹は25両」の旨の記述

188　「ルウダ‥‥安政六年己未暮春上梓」（図なし）一枚刷、同一のもの数点

アロエなど色刷図５点：明治４年の竹本要斎物産会の折に出版された『含翠園物産会抄輯』（→冊80・199）からの切抜き

『画本鶯宿梅』の手彩図

粟製品のラベル・広告など、20数点

189　アラセイトウ類の圭介自画（冊188）と文「文久三年下種‥‥」

卯之吉、コアツモリ図

191　「番紅花インデヤサフラン、寛政十二申歳、初テ紅毛小船ヨリ帯来ル。漢渡ヨリ鮮紅ニシテ香気強ク、弁長シ‥‥」（水谷記聞の写しか）

195　トガクシソウ（破門草）一件の関連図・書簡：破門草事件というのは、トガクシソウの属名命名をめぐるトラブルで、伊藤篤太郎が東大教授矢田部良吉から教室出入りを差し止められた件をいう（牧野富太郎、「園芸植物瑣談13」、『実際園芸』、26巻１号、1940年）

伊藤篤太郎発、田中芳男宛書簡、明治19年６月10日付、於ケンブリッジ大

196　『桜艸花形附』、水谷豊文編図譜：自筆、124品の墨絵

「［桜草］流行シ、ソノ専ラ盛ンニナリシハ天明ノ頃ヨリ寛政年間ニシテ‥‥文政天保年間、コノ珍花［裏紅］ヲ誇ル徒モ多ク‥‥」：『花史雑記』より

「桜草‥‥近比東都品類二百ニ過グ」：『屋漏堂花譜』（享和元年序）の写し

197　加藤竹斎自筆サツマイモ図、２点、明治18年11月

『東京日日新聞』、明治11年１月16日、薩摩甘藷翁〈カライモオンジョ〉一件と翁の墓

198　牧野富太郎から圭介への質問と返答、明治15年９月　→冊166・233・東山本

水谷記聞引用文への圭介注、「三園は亡友神谷喜左衛門也、尾ノ本草家」

199　ザウシサウ色刷図「ヲリハントフート、象趾草」：『物産会抄輯初編』（喜楽堂樵父編、含翠園蔵版、明治４年竹本要斎物産会）　→冊80・188・別11-33本冊５

「三田印刷所発売書目」
200 「婆羅門参」、栗本丹洲、文政４年：和名金梅笹（キンバイザサ）の名の由来
201 引札：水谷助六追薦本艸会　→冊110
202 ワタの種子
206 菊書『猶存録』の転写
菊花の型とその名称：『菊花壇養種』からの抄写
番付型一枚刷、三州菊屋清六、菊56品
207 「明治廿三年十一月八戸菊銘鑑」、青霞堂浦山政吉、1125品：書袋は冊206にあり
『錦菊図譜』：洋菊44品の説と８品の彩色図（うち５品は冊206にあり）
『後の花』、正徳３年本の転写
曲直瀬正貞自筆、キカシグサ図
211 雪斎、キズイセン図
安政５年、金魚草が米より渡来（草木名鑑）：万延元年、浪華より尾張へ来る
雪斎、ギリトリヤ図（白花・青花）、キクイモ図、キキヤウペチュニヤ図
213 北氷洋探険船ヴェガ号訪問記、伊藤篤太郎、郵便報知新聞、明治12年12月11日号
安政２年、ユスデシヤカッシネ（サンゴバナ）渡来（草木名鑑）
嘉永６年、ユスデシヤカシネヤ、長崎より来る
嘉永５年、アメリカ種ユステシヤ、渡来（圭介のメモ）
214 （冊215にわたる資料が多いので要注意）
『資生圃百合図』、馬場大助原画・加藤竹斎写、40品：原本はクラマー所蔵
水谷豊文自筆百合図、９点
加藤竹斎原画・時田喜忠写百合図、３点
関根雲停のユリ画をのちに服部雪斎が写した下記の４点がある
白博多百合、嘉永元年５月、雲停写：明治11年雪斎写
津軽産鉄砲百合、安政２年、雲停写：明治11年雪斎写
タモトユリ、弘化２年、雲停写：明治11年雪斎写
ウバユリ、弘化４年、雲停写：明治11年雪斎写
雪斎、サクユリ図、紅雪（ユリ）図
215 岩崎灌園画（本草図譜）、雪斎転写、ユリ約10点

雪斎、カノコユリ図、タモトユリ図

216　ミスミソウ66品の彩色図譜：桜渓主人著・阿部喜任校訂『長楽花譜』の略写

217　引札：吉田雀巣庵追薦博物会、万延元年３月25日、於名古屋七寺、茶色刷　→冊59

218　大窪昌章印葉図、冊212～218辺に多い

220　雪斎、シラネアオイ図

「秋海棠‥‥寛永十八辛巳三月始テ中華ヨリ長崎ニ来ル。正保ノ初ヨリ諸国ニ流布ス」（水谷記聞？）

「ベゴニヤ・レキス‥‥明治四年五月物産会ノトキ、横浜在留ノ独逸人クラマ、携へ来ル」（圭介記）

竹斎、ベゴニヤ図、２点

221　雪斎、ジュウニヒトエ図

竹斎、シコウラン（指甲蘭）自筆図

222　「蓴菜粘稠液細泡論」、伊藤篤太郎、『植物学雑誌』、16号、明治21年６月：別刷

223　『八翁草』（オキナグサ、不老亭編、嘉永２年３月）、刊本の転写：刊本が白井文庫にある（特1-3141）

226　「日本産しぼがまぎく属説」、伊藤篤太郎、錦窠翁九十賀寿博物会誌、明治26年：別刷

227　しのぶ刷り（忍捩摺（しのぶもじずり））の帛紗、実物３枚

288　「芍薬図集」（仮題）、内山卯之吉蔵本の転写、15品、花の一部のみ着色

芍薬花銘、計122品：出典は水谷記聞？

芍薬花銘、20品：出典は花名集

「芍薬品評捷径」〈しやくやくめきき・はやがくもん〉、一枚刷、明治19年

229　雪斎、シロカネソウ（白銀草）図

232　「百日草ハ近畿花戸ノ称ニシテ、又長生菊‥‥我邦ヘハ文久［安政？］七年創（ハジ）メテ米種ヲ伝フ」、「文久二年、仏」、「文久二戌、重弁ノ品ノ種子、フランスヨリ持帰レリ」

233　エビネに関する牧野富太郎の質問と返答：明治22年５月13日　→冊166

エビネ24品の花銘・形状、大阪天満植木屋尾張屋九兵衛より：「一種ニ付、三匁五分」

235　『泰西本草名疏』の見返し刷、書店名に貼り紙：同題箋、上・下・附録

の刷もあり

241　雪斎、ヒナギク図・ヒメカンザシ図

243　交友社博物会出品目録：明治15年７月２日、於三重県下桑名清水町浄土寺　→冊６

巻末：圭介印、８点、あまりキレイな捺印ではない

巻末：「錦窠真逸」の署名がある

245　雪斎、ノダケ図

248　石斛品評会、文化４年８月、於洛東清井亭：16品の花銘と形状（本草余纂？）。

249　雪斎、オランダセンニチ（セリヤアン）図・センナ図

オランダセンニチ（キク科）、「天保13年春、長崎から本種の種子が届いた」旨を圭介が記す。東南アジア原産で、形状がセンニチソウに似ている。

251　鳩麦煎餅などの広告・ラベル

252　引札：水谷豊文追薦本草会、嘗百社　→冊110

雪斎、ハナカタバミ図

253　扉：圭介印、「九十一翁」各種など、計８種10点

大窪昌章印葉図、冊253～254にかなりの点数がある

伊藤圭介画らしいスミレ図、25点

254　パンジーの渡来関係資料、「文久二戌冬舶来、英ヨリ渡ル」など。また「三色スミレ」の名や、花戸の呼び名も記す

パンジー・カタログ（ハンブルク）、1890版・1896版

巻末：「錦窠老人、時歳八十」の自署と印

東山　原本冊*113*を４分冊化（登録番号：2-90～2-93）：現在の国会本冊217と冊218のあいだに位置する「ミ」の部の冊子である。

扉、「伊藤本家ノ必需品ニシテ、禁出門外。孫篤太郎ニモ嘱托ス。陸続増補スベシ。伊藤圭介記」

牧野富太郎からの質問（ミミカキグサ）、明治15年９月

加藤竹斎自筆図、ニホヒミゾホホヅキ

栗田万次郎、「寄生類ヲ盆栽スル新法、附水蘇ノ説」

（いその　なおひで　慶應義塾大学名誉教授）